
皇帝の剣と姫君 第二部

夏川まさむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

皇帝の剣と姫君 第二部

【Nコード】

N8109H

【作者名】

夏川まさむ

【あらすじ】

皇帝ヴィスターク五世の友たるカーテーギユウは、友人の願いを聞き亡国の王女を追って旅立った。一方、帝都ではカーテーギユウの妹マリリーシアを中心とした宮廷社会の駆け引きが、次第に暗雲を引き寄せていた。

一、夜宴の客人

1

シルヴェンライン ――― 一 王国三六公国を束ねる帝国
の中央に、まだ夏は訪れていなかった。

中央地方と呼び習わされながらその実、国土の北限たる北の銀嶺に寄り添うこの地方は、帝国の中でも夏が遅い。そして、厳しい冬が見舞う土地でもあるが、冬を越すと穏やかで安定した気候であることが、中央地方の広大な平原を豊かな穀倉地帯に育てた理由でもある。

この豊かな平原に、帝都リスタークは長く繁栄の時代を鎮守するかのようにあつた。

その帝都を雷雨が襲った。天の気まぐれとあれば、珍しくはあれども事もない。家に引つ込めばいいだけのこと。豪雨ではあったが、災害と呼ぶほどに人の生活を脅かしはしなかった。

たたきつける大粒の雨は、貴族たちの別邸が立ち並ぶ外苑ロンスキンにもさほど時間差をおかずに降り落ちた。

次第に密度を増やす空からの水滴に、外苑の衛士レイトリ・フエナーは顔をしかめた。日が完全に覆われ、まるで時刻が先を急いだかのように暗い。実際には、先刻昼食をとって警備の任を同僚から引き継いだばかりだ。すなわち、当番の交代はまだ三刻も先であり、これから降り出す雨は、自分の当番の開始時刻に合わせて降り出してくれたということであった。

滝の飛沫のように大粒な雨は、あつというまに叩きつけるような豪雨となった。

レイトリは皮の外套を被り、制式装備の槍を手に立ち尽くす。仕方ない、これが仕事だ。背中には石壁。高貴な人々の間で話題をさらっているというユルフレーン家の別邸の外壁である。

ロンテスキン外苑の守護を司るクラウド準男爵直々の命令で、常に複数名の衛士がこの邸の警備に当たっている。

先日、かのマリーシア・レ・ユルフレーン嬢のあとを尾けていた男を目撃してからというものの、クラウド・ロンテスキンの覚えがよく、レイトリ・フェナーはユルフレーンにまつわる仕事に回されるようになった。一躍、皇妃候補となった女性の警護となれば、さぞや名誉ことであろうと思いきや、そうでもない。

レイトリをはじめとする庶民からすれば、華々しい貴婦人の登場や、その輝かしい世界には憧憬はあっても、遠くの出来事みたいなものだ。それこそ桃源郷カーティーンのような話。そのかわり、壁の向こうに必ず存在している世界なのだが。

いまは背中の壁が別世界との境い目。

豪雨は、風がないだけいいものの、石畳には短時間で水溜りの膜ができあがった。石の継ぎ目を伝って街路のわきの溝へと流す、水はけをよくするためになされた工夫も間に合わなくらいの雨水だ。支給品の革の長靴はすでにじわじわと水が染みている。ぴっちり到着込んだ外套には水をはじく油が塗りこんでいるが、いずれその防壁も破られるに違いない。

降りが強いぶん、しばし耐えれば止むのではないかと、願望も含めての予想だったが、その雨はやむ気配も弱まる気配もない。

レイトリは手持ち無沙汰に、フードの下、制帽のひさしから垂れ落ちる水滴をぼんやりと見つめていた。警備中ではあるが、なに、往来には雨滴がたたきつけられる音ばかり。人気は微塵もない。

と、視界が白い閃光に一瞬覆われ、すぐさま雷鳴が轟いた。

すぐそばで鳴った轟音に、恐ろしさで首が竦む。

また、稲光が走った。

白く反転する光景。レイトリは、脈絡もなく眉間に衝撃を受けて水溜りに突っ伏すように崩れた。

豪雨に、水溜りを打つ足音すらかき消されて、人影が静かにレイトリに歩み寄る。

首尾よく、矢が衛士の眉間を打ち抜いたようだが、狙ったのは心の臓であった。標的の始末を確認しにきたのだ。

その人影が、突っ伏した標的を足でひっくり返そうと靴底を浮かせた瞬間、石畳に転がっていた槍が、両足を払った。

勢いよく、レイトリは立ち上がった。ぶはっと殺していた息を吐き、砂まじりの雨水を、いきり立つ獣のように吹き出す。

命を狙われた！

衛士隊に勤めて五年。未知の経験だ。こういうときはどうすればいい？ そうだ、笛を、と警笛を咥えて吹き鳴らす、雨水を詰まらせた細い人差し指ほどの笛は、頼りない音しか発さなかった。

その隙に、人影は体勢を立て直し襲い掛かってくる。ええい、こんなことなら、飛び掛って押さえつけてしまえばよかったのだ。

捕縛経験の無さを呪いつつ、レイトリは暴漢の剣を槍で受ける。

交差する鋼鉄の向こうに、彼は見た。

あの男だ。ユルフレーン家の令嬢をつけていた。鋭く冷たい眼光。瘦けた頬が、腹を空かせた猛禽を想起させる。

この男だ。

上司の顔を思い浮かべて恨み言を呟く。レイトリは先日からクラウブに連れまわされていた。ユルフレーン家を探っていると思しきこの男の顔を知っているのは自分だけなのだ。だが、その仕事は相手に探っていることを気づかれるということでもあったのだ！

こんなことなら、この数日間、もっと真剣に探せばよかった。あるいは、仮病でも使ってクラウブの命令を断れば良かったか。

誰も気づくことの無い雷雨のなかのことであった。

一、
夜宴の客人（後書き）

半月前。

廊下の窓から差し込む明るい日差しは、夏の訪れが間近に感じられる。帝国の豊穡の源、穀物を育む夏という観念は、シルヴェンラインの人々にこの季節を心待ちにさせた。

もっとも彼には、心待ちにする夏より、例年になく職務上のあれこれをどうしようかと思ひ悩むことで手一杯だった。

彼は廊下を進む。

小脇には、やや縦長の制帽を抱えている。一見すると布製の帽子だが、鉢金が裏打ちされ、額には衛士隊の金鍍金めっきの徽章が掲げられているから、初めて手にしたときには予想外の重みを感じたものだ。熟練の者は、衛士隊の栄光の重みだからいつなんどきも被っておけ、と訓を垂れる。

まさかその訓に命を助けられる日がこうとは、レイトリもこの時はまだ予想だにしていなかった。

レイトリは、訓練された規則正しい歩調で、クラウド・ロンテスキン長官の執務室前にやってきた。またしても、呼び出されてしまったのである。いったいなにを気に入られたのか。

「レイトリ・フェナー、入ります」

クラウドは机を前に腰掛けて、千名を越える衛士のうちの一人を迎えた。

用向きを尋ねる部下に、彼は言った。

「友になれ」

「は、どちらにお出ですか」

思考回路の融通の利かなさに、クラウドは眉間を揉む。

「供ではない、友だ」

「は？」

理解せねばならない。彼にとっては、準男爵という身ですら、雲

の上の存在なのだ。

「任務だ。君には、我が友人として、これからしばらく貴族たちが催す宴という宴に出席してもらおう」

その宣言を合図にしたかのように、隣室の扉が開いた。中年の侍女と侍従が行儀よく現れて、レイトリの腕を左右から持ち上げる。

「レイトリどの、どうぞこちらへ」

彼らは、くるとレイトリの向きを変えて歩き出した。それはお連れする、というより連行という類のものに見えた。

その夜は、ヴェネルセン伯爵の名前で宴が催される日であった。子息の婚約発表という名目で、ゆかりの浅いところにまで招待状は届いており、それはクラウブのもとへ届けられた。もつとも、ロンテスキン家は外苑の管理を皇帝に任された小領主という形式の地位であり、貴族たちが外苑に持つ邸で大々的に催す宴には、儀礼的にたいてい招かれる。いつもであれば、挨拶状を返して済ますことが多いが、しばらくは有効に立場を利用できそうだ。

集まった多くの客人を、伯は満足げに見回しつつ挨拶をした。そのあとでこの宴の主役が紹介されたが、伯の長い独演に、来客者たちの祝福の笑顔もやや疲れ気味だ。

着飾った伯爵令息とその花嫁は、初々しく、幸せそうであった。家柄でいえば、名家同士の婚姻であるから、政略的な部分は大いに含まれるだろう。それでも、貴族の婚姻は親の命令で結ばれることが多いのだから、当人同士が幸せであれば、そう悪い結果を招くものでもない。

「伯爵の人となりはよく知らないが、権勢欲の表明か、あるいは強い者への恭順の証というところかな」

一見幸せそうな主役の男女を見ていてそんな言葉が出るとは、自分も相当あの友人に毒されたものだ、クラウブは笑顔の裏に思った。新郎新婦、両家の背後関係を想像すると、さまざまな繋がりが

ら力関係と派閥が見え隠れすることを、彼は脳裏にめぐらせているのだ。たとえば、伯爵はそこに力のある立場にあり、子息の花嫁の家は、より権勢を振るうアルター公に近しい家門だ。それだけで想像は膨らむというものだ。

そこへ、情けないほど緊張した声が彼に直訴した。

「か、閣下、私は閣下の警護役としてお供すればよかったのではないでしょうか」

「閣下はよせ」

クラウブは、横に立つ新たな友人の肩をたたく。彼自身が貸した衣装の上着から、上質な手触りが返ってくる。衛士として鍛えられたレイトリの引き締まった体軀は、衣装の仕立ての良さを存分に見栄えさせたが、場の空気にすっかり縮こまった彼を引き立てるには、この衣装は逆効果であった。

「警護役では、宴の広間まで連れて来ることができないだろう。だからいいか、ここではお前は俺の友人だ」

もう一度、二度、肩をたたく。それでほぐれる緊張ではなかったが。

「よく探せ」

クラウブがレイトリを呼び出した理由はこうだ。

レイトリは、マリーシア・レ・ユルフレン嬢のあとをつけていた、貴族風の身なりをした男を目撃している。外苑ロントスキンにいる貴族であれば、交友関係から社交の場に姿を見せるはずだ。それ以上に当てはなかったが、どこかの宴で出くわす可能性は十分にあった。そのとき、面を通せるのは唯一顔を知っているレイトリだけなのだ。

「は……しかし、必ずしもこの宴に招待されているとは限らないのでは？」

緊張しきりで周りが見えていなかったレイトリだが、さしあたり仕事に集中することで場違いであることを忘れようとした。いうなれば、観察者に徹してこの宴の当事者であることから一步身を引こ

うと自己欺瞞することにしたわけだ。

そんなレイトリに上司は答える。

「一度で見つかる幸運など、あてにしてはいないよ」

とすると、よもや自分は宴のあるたびに、こうして引っ張り出されるのだろうか。とんでもない失敗をしでかす前に、早いところ幸運を掴まなければ。

部下の心情も知らず、クラウドは手馴れたように給仕の盆から硝子の杯を取って口をつけた。

レイトリがきよろきよろと視線をめぐらすのは仕方ないとして、せめて麗しいご婦人を物色する若者を装うことにする。

そういえば、そもそもの発端であるマリーシア・レ・ユルフレーン、彼女は来ていないのだろうか。ヴェネルセン伯爵の、招待状のあて先の選別方法に、自己顕示欲が加味されているのなら、話題の人物であり名家ユルフレーンの令嬢である彼女が外れることはないはずだ。

そんなクラウドの期待は外れ、マリーシア嬢の姿はなかった。

(……………期待?……………そうだな、彼女がいれば問題の男も見つけやすいかもしれない)

自己分析によって導かれる感情を、彼もまた自己欺瞞で思考のすみに追いやる。それこそ安直な発想だったからだ。

2 (後書き)

朝はいつも、早くに目が覚めた。

種火を起こして、朝食の支度を始めなければ。無意識に前髪をゆつくりとすき分けて、手の甲を額に乗せると、薄く明るんだ天井を見上げる。カーテীগユウが出掛ける時間に合わせて、食事の用意をしなければいけない。

そんな過去との時間の錯覚をよく覚えた。

寝具をのけて起き上がる頃には、感慨もなく短い期間のうちに急変した身辺についてを思い出していた。

「おはようございます、お嬢さま」

ローナがカーテンリットを開けると、まぶしい光が部屋いっぱいに注ぐ。「いつもお早いですね」

感心したように口にするのがローナの日課になった。

着替えて、朝食を済ませる。外苑ロンテスキンのユルフレーン家別邸では、使用人はローナの一人きり。身支度から給仕まで、彼女が世話をする。食事は、一人では心細い、というマリーシアの願いで、ローナも一緒に採るようにしていた。偽りの素性で言うところの祖母に当たるラーナツタ夫人は、先日一旦領地へ帰ってしまったので不在なのである。そんな二人の元へ、明日この別邸に戻る予定だと報せる夫人からの便りがあったばかりだ。

マリーシアの素直なわがままは、良い傾向だと思う。町娘が貴族社会の最も高みに近い場所へ、いきなり連れてこられたのだ。一見些細に思われる心の重石も、慎重に取り除いてあげなければ、知らず知らずのうちに弱ってしまう。心も身体も。

今は、別邸のささやかな庭園の花壇で、花々の世話をするマリーシアを、ローナは見守っていた。

花の世話で土いじり。マリーシアの普段の生活にもっとも近い時間の使い方だった。帝都市街にある我が家では、鉢植えの世話をし

ていたし、農民でなくても、共同の菜園で野菜を育てることはしていた。ただ違うことといえば、貴族にとってのそれは、美の鑑賞と娯楽でしかないということだ。それすら、下々の者のような真似、と唾棄する貴族もいる。どちらにしても、けして生活の足しに野菜を育てたりはしない。

幸い、ラーナツタ夫人も花の世話は好きだったから、マリーシアにそれをさせることにローナは抵抗感がなかった。日々の時間に楽しみを見出せるなら、喜ばしいことだ。

ローナはマリーシアの様子を伺ってから、視線を手元に戻した。テーブルの上には、束になった手紙が乗せられている。

すべてお茶会や宴の招待状だ。便箋はすべて開封され、整理されている。整理とは、相手の地位、家同士の力関係、そのほかの絡みなどを考慮したものだ。

今はまだ、どの招待にも断りの返事を出している。

マリーシアには、返事をしたためる傍ら貴族令嬢らしい手紙の作法を教えていた。作法といっても、形どりの礼儀作法はマリーシアも幼いころ通った教師の元で学んでいることがわかったので、言葉の選び方や差出人の体面を傷つけないための配慮の仕方だった。それから、習い事ではわからない事柄を。

貴族の娘たちは封をするのに、仰々しく書簡のような蠟を使わず、さまざまな色のものや香りのするものを選んで楽しんでいる。最近の流行りは、透明に近い淡い色の蠟をつかって、小さな花卉を押し花のように蠟付けして封をするものだ。

流行りに乗りすぎて派手すぎるのは、ユルフレン家の格に相応しくないばかりか、マリーシアの性格にも似合わない。マリーシア自身には、今日びの令嬢たちの常識の度合いがわからないだろうから、ローナはおしとやか目な飾りを奨めたのであった。

まずは、奨められたとおりにマリーシアはやってみた。貴族社会の常識を持ち合わせていないのだから、まずは与えられた役柄を演じてみるしかないのだが、そうした考えと合わせて、ローナ自身と

彼女の助言を信頼もしていた。

昨日までにマリーシアがしたためた断りの手紙をまとめて、こんどはちらほらと届き始めた今日の分をローナは調べ始めた。その数の多さには、さすがに溜め息が出る。歳だろうか。

そこへ、マリーシアが花の手入れを終えて戻ってきた。

「お茶にいたしましょうか、お嬢さま」

便箋をテーブルに置く。

どうやら息抜きが必要だ。息抜き以前に、ローナにとってマリーシアとのそれは一つの楽しみでもあるのだ。

「あら、お茶なのね。ちょうどよいところへ帰ったかしら」

テーブルにお茶道具を並べ始めた頃、楽しい声色が降って沸いた。

庭園である中庭と屋内をつなぐ扉から姿を見せたのは、ラーナッタ夫人である。

「奥様！」

思わずローナは声に出していた。予定は確かに明日戻ると便りにあったはずだ。

「まあ申し訳ありません、お出迎えもせずに」

「いいのよローナ。急に帰ったのだもの」

確かに勝手口の合鍵があれば、邸への出入りは事足りるが、大貴族ならば本来ありえい気軽さだった。もちろん、ラーナッタ夫人も使用人を少しは連れているから、すべて手ずからする必要はないが、だとしても出迎えないことに叱責があっても無理はない。いや、あつて然るべきなのが、普通の大貴族というもの。しかし、夫からユルフレーン家当主の座を引き継ぎ守る女主人は、そんなことは気にも留めず、奇妙にたくましかった。

早速、お茶の席に混ざった夫人は、ひとしきり他愛のない話題をお茶請け代わりに喋っては、咽喉の渴きを潤した。

そして話題はテーブルの上の招待状へと流れた。

ラーナッタ夫人は、整理された過去の招待状を、端から目を通し

ていく。

「先日のヴェネルセン伯爵の招待は断ったのね」

まず抜き出したのはその一枚。

「まずかったでしょうか、奥様」

ローナの問いの答えを心配そうに見たのはマリーシアだ。宴に出ないのは、自分のわがままであったから。そう窺える表情だ。

「いいえ、まったく問題ないわ」

すっぱりと気持ちよく、ラーナッタは言い切った。

「あの方の見栄や自尊心にお付き合いする必要はないわね」
抜き出した一枚を夫人は元に戻す。

さらに新しい招待状に目を通していく夫人に、マリーシアは緊張の面持ち。

夫人はまた何通かを抜き出してテーブルに置くと、ふうと溜め息をついた。

「ほんとうに、多いわねえ」

朗らかな声色に、マリーシアの肩の力が抜ける。

そんなマリーシアを観察していたローナは、笑みがこぼれる口元を手で覆って言った。

「お嬢さま、そんなに身構えずともよろしゅうございますのに」

「あら」

様子に気づいて夫人も招待状に落としていた視線を上げた。

「仮にとはいえ、あなたはわたしの孫娘なんですから、もっと楽にして欲しいわ。もう少し我がままを言ってもいいくらいねえ」

その言葉どおりに甘えるわけにはいかないものだが、ラーナッタ夫人の暖かさは、十分にマリーシアの胸を満たした。

孫娘の、遠慮がちにはにかむ笑顔に、ラーナッタ夫人も微笑む。

「それにしても、人気があるわね。これは予想以上だわ」

ユルフレーン家は、それほど人々の記憶から遠のいていたのだ。公の位を持つ大貴族であったユルフレーン家だが、後継者を失い、ラーナッタ夫人の夫である公自身までもが没し、帝国での発言力、

いわば権力を失って久しかった。

ラーナツタ夫人は、ユルフレーン家に連なるといふ、欲の皮を突っ張らせた名ばかりの血族を遠ざけ、夫が守った高潔な家門が汚されぬように守ったが、是が非でも後世にそれを残すということは、考えていなかったようである。時に夫人を説き伏せようとする人もいたが、彼女はその点については頑なだった。血脈が途絶えれば帝室に所領が返還される可能性が高いことはわかっており、それもまた夫の意に沿うとの思いがあったからに違いない。

そうして、いずれ長い歴史に自ら幕を下ろすであろうユルフレーン家は、人々から忘れ去られていった。

だから、再び舞台に上がったユルフレーンの名が、どこまで注目を浴びるかは想像し難かったのである。

愛らしい貴婦人の鮮烈な登場は、よほど人々の興味を掻き立てたのだろう。

夫人には少し誇らしくもあつた。なぜ、といえば、自分が目を掛けた娘にこれほどまで魅力を感じる人たちがいるのだから。問題は、彼女に近づいてくる人々の思惑であつたが。

そうこうしながら、招待状に目を通していたラーナツタ夫人は、また一通を束から抜き出してテーブルに置いた。

「アデルワント伯爵夫人だわ」

困ったようにラーナツタはため息をついた。

「アデルワント伯爵夫人でございますか」

女主人の胸中同様、ローナは眉根を寄せた。

なにやら怪しい雲行きを、マリーシアはやはりやり過ぎすしかない。

彼女は無意識にティーカップに口をつけた。こんなときお茶がおいしいとわかるのは、とりあえずいいことだと思う。

帝都外苑ロンテスキンの領は、広大なシルヴェンライン帝国の方々に領地を持つ貴族が、リスターテルクに長期滞在するための、いわば保養地であった。

もちろん、貴族たちは帝都の内外に利便と快適さを求めていくつか邸を構えることが少なくなかったが、多くの貴族たちが一つの場所に固まって邸を構え、街の様相を呈するのはロンテスキンのみである。茶会や狩猟会、夜宴など社交の場の持ちやすさを理由に長居する人々が多い。

アルター公ヒルデムが、帝都とその近隣に持つ八つほどの邸のうち、一つは当然のごとく、このロンテスキンにあった。

その権威にしては、控えめな邸であった。

代々のアルター公が愛用したロンテスキンの邸を、ヒルデムが取り壊して、新たに建てさせたのが今の邸だ。

ロンテスキンは区画を整理して街の外観を作っているため、広大な敷地は取れないように定められているのだが、かつてのアルター公たちはその権力でロンテスキンから自分用の土地を半ば奪い取っていた。

ヒルデムは邸を建て替えて残った土地に公園を造成したり、新たに一流の職人たちによる御用達の店を入れさせるなどしてロンテスキンに貢献し、他の貴族の賞賛を集めた。

先祖の横暴を、彼は奉仕の精神に富む人物という評価にすり替えたというわけだ。そこには彼の計算高さもあったが、本心から無駄に贅沢すぎる別邸を好ましく思っていないところもあったので、それを見抜いた人々の好感も引き出していた。

高貴な身分であり、謙虚と気高さを持つ。

彼は、貴族という人種のなかでの人望を、確かに持っていた。

その日のヒルデムは来客を持っていた。

アデルワント伯爵夫妻との、ささやかな昼食会である。ささやか
といっても、給仕に人を使い、卓には手間を掛けた料理が並ぶほど
のものだ。

アルター公であるヒルデムと伯爵とは、領地も近しく親しい交流
がある。長年の個人的な付き合いから、昼食の席はとても和やかな
ものだった。

昼食を終えると伯爵のもてなしを妻に任せて、ヒルデムは伯爵夫
人を庭の散策へ誘った。

アデルワント伯爵夫人とは、伯爵家との交流とは別に旧知の間柄
である。夫人は、アルター公国の名家の出身で、ヒルデムとは社交
の場で若い頃から面識があった。もともとは公子ヒルデムの花嫁に
と夫人の父親は考えていたが、幾多の花嫁候補から突出できるほど
に、彼女の父親には力がなかった。それも今となっては古い話であ
る。

「それで、お忙しいヒルデム様が、なんの御用ですの」

四十を越えてなお艶然とした美しさをもつアデルワント伯爵夫人
は、本題への足がかりをあっさりと提示する。

足を止めたヒルデムは、微笑を隠さず応じる。

「たしかに、貴女のお力を借りたいと思っている。が、貴女はそん
なにせっかちだっただろうか」

「うわべの言葉あそびで喜ぶ歳でもありませんのよ。そのように扱
ってくださるのは嬉しいことですけれど」

口元を扇で隠して微笑み、微笑の残り香を漂わせて扇をたたむ。

「なるほど。いくつになっても女が上手をいくものだ」

アルター公となって齢を重ねた男は、動じることなく立ち止まっ
た歩を進めた。

人の手の行き届いた庭園には、帝国の初夏にむけて花をつける植
物のつぼみが色づき、早いものは花開いて瑞々しさを誇っていた。
シルヴェンラインでもっとも暑い頃には枯れ落ちてしまうから、そ
うなる前に水切りをして花瓶に飾り、残り短くなった花の命を暑い

時季に涼風とともに愛でるのがこの国の、初夏の趣きのひとつだ。

無遠慮をお許しただけるなら、と伯爵夫人が前置きしたのをヒルデムは柔らかい目線で促がす。

「ヒルデム様は、最近でしゃばってきた古い家門を気になさっている様子」

「でしゃばるなどという物言いは心外な。古くから帝国を支えてきた良き貴族が、陛下の御許に集うのは良いことだと考えている」

ただ、と付け加えたヒルデムは先を歩くことで表情を窺わせない。「長らく国事から離れていた家門に、勇み足はつきものだ。それとなく導いて差し上げるのが貴族同士の友情ではないかね」

かつては嫁ぎ先にと一族から囑望されたその背中を見つめて、伯爵夫人は過去の自分の哀れむように嘆息した。

「閣下のお立場では、発言にも体裁を必要とされるのは理解しておりますけれど、そんな上っ面の嘘、どんなお顔でおっしゃっているのかしら」

背中では応えず、先に行く。

夫人の足音が途絶えると、ヒルデムは取り繕った貴族の顔で振り返り、手を差し伸べる。

「それでわたくしに、ユルフレーンの娘についてさぐりを入れろと」その手を、威風を漂わせて伯爵夫人は取ってみせる。かつて少女であった自分ではなく、対等の人格を持つ女性として。

「さぐりというほどではないのだよ。他愛のない会話で結構。様子を窺うていどのこと。貴女の誘いなら籠もりがちな深窓の令嬢も姿を見せるであろう」

「いいですわ。ユルフレーンのご令嬢をお誘いいたしましょう。私も興味がありますの。ですが、あなたにお味方するとは限りませんことよ」

庭の端まで歩くと、伯爵夫人はその手を離れて庭を、一度だけ振り返る。

彼女を、夫が迎えてくれた。

アデルワント伯爵夫妻はその後、アルター公の邸をあとにした。
伯爵夫妻の馬車が走り去るのを窓から見下ろしながら、アルター公は冷たい思考に沈む。

（ユルフレーン……落ちぶれた家門は、おとなしく消え去っておれば良いものを）

かつては大貴族。皇妃を輩出などしようものなら、広く根を張った血脈が力を盛り返して権勢を振るってもおかしくはない。

（状況次第では、消し去るも良からう）

日差しが、布の日傘から梳きこぼれる。

暑気はまだないが、良いお天気の日が続くと夏も近そうに思えた。日傘を傾かせて青い空を見上げると、気持ちの良さに顔がほころぶのだが、ふとうつむいて自分の足の行く先を考えると憂鬱顔になる。

「お嬢さま、笑顔でございますよ」

後ろを歩くローナには、見えずともお見通し。

「はい、ばあや」

目的のお邸の門は、もう目の前。左手にずっと続いていた石壁の塀は、そのお邸のものだ。優雅な曲線で飾られた塀の造りに、お邸の造りを想像する。ロンテスキんに立ち並ぶ家屋は、どこをとっても芸術的な部分に手抜きがない。

このお邸は、彫刻などの威圧感とは皆無で、落ち着いた趣きを良しとしている風だった。

こうした体裁を好む主人の人柄とは、どういうものなのだろう。これから何う場所について、少しでもよい先入観を持ちたくて、マリーシアは想像をめぐらした。

そしてふと、その思考の根底の間違いに気づく。

招待状の差出人は、この邸の主ではなくその奥方だった。

心の準備がすっかり無に帰してしまったときには、アデルワント伯邸の門は目の前だった。

来客の頃合いを見計らって門前に待っていた、アデルワント家の家人が殷勤に礼をする。

「ユルフレーン家のマリーシア様でございますね？」

身形を整えたその家人は、招待状を受け取る前にそう訊ねた。

「はい」

マリーシアが応じると、ローナが素早く招待状を家人に差し出す。

型どおりに彼は書面をあらため、扉を開いた。

彼らは馬車が来れば馬車用の門扉を開くが、ロンテスキンではよほど邸同士が離れていない限り、貴族たちも自分たちの足を動かす。若い貴婦人たちが一人歩きすることも多い。高貴な身分と、立ち入りを許された者だけしかないロンテスキンという空間は、それだけ信頼されているのだ。

門扉の脇の扉をくぐろうとしたとき、マリーシアは家人が新たな客を迎える声を聞いた。

「これは、レプシーヌ男爵夫人」

緊張に上ずった声。

「ようこそおいでくださいました」

家人の礼を受け、マリーシアのほうへ歩いてきたのは、すらりとした立ち居姿の貴婦人だった。

その年上の女性を見たマリーシアは、羨ましいほどの色香を感じたが、彼女の歩く姿になぜか威風堂々という言葉を脳裏に浮かべた。彼女が引き連れているのが、侍女や召使ではなく、騎士だからだろうか。その騎士は彼女に対して、高貴な女性に奉仕する態度ではなく、まるで主君であるかのように付き従っているのだ。

彼女は緑色の瞳でマリーシアに目礼した。

気高くありながら、他者を受け入れる寛容さがあり、同時に他者を立ち入らせない深みを持つ瞳であった。

「やはり、いつ見ても素敵なお髪ね」

まったく無防備に、きよとした顔だった、あの少女は。

フィンプリース・レプシーヌ男爵夫人は、今日の主役であろう少女の姿を脳裏に描いていた。

思わず、口の端に笑みが忍び出てくる。

「愛らしいご令嬢でございましたね」

後ろを歩く騎士が、主人の機嫌を察して感想を述べた。控えめで

も、激しく主張するでもなく、空気のように心煩わす必要のない性格の男だ。

彼の弁には、まったく同意するしかない。

「あなたの女性の好みは、ああした方がよいのかしら？」

「さて、我が主君にはどうお答えすればお喜びいただけるやら」
騎士は肩をすくめる。

それにしても、あの少女はこの場がどういう場であるか、心構えが出来ているとよいのだが。そんな風に心のうちで言葉にしてみても、レプシーヌ男爵夫人は気づいた。どうやら自分は少女寄りの立ち位置で状況を見ているようだ。

「肩入れしたくなる面立ちだものね」

独白を呟いた廊下の先の、明るく日がさす窓辺を、アデルワント伯爵夫人が悠然と歩いていた。召使いに、お茶を運ばせているところであった。

彼女は召使いに視線で促がすと、レプシーヌ男爵夫人を迎えた。

「あら、レプシーヌ男爵夫人。貴女がわたくしのお茶会に来てくださるなんて」

「ご招待はいただいているはずだったけれど、お邪魔でしたか？」

レプシーヌ男爵夫人はアデルワント伯爵夫人の誘いを受けたことがまったく無かった。過去、敵意や優越を背景に届けられた様々な集まりの招待状を、彼女は丁重に断り続けてきたのだ。

「いいえ、とても嬉しいわ」

アデルワント伯爵夫人は、一分の隙も無く微笑む。

「さしもの貴女も、ユルフレーン家令嬢に興味がありということかしら？」

「そうですね」

彼女は見栄を張るでもなく、さすが清々しく認めた。

一方の二人といえど、ローナは案内の召使いに、化粧直しのため

の客間を借りて時間を作った。

髪も化粧も乱れてはいなかったが、さあ、お嬢さま、と化粧台の前にマリーシアを座らせる。お茶会だから、それほど凝った髪の手結い方も濃いお化粧もしないものだが、一分の隙だって見せてはいけない。名家のお嬢さまとはいつもそうしたものです。今日は格別にです、とローナは気張った。

なんだかそれが可笑しくて、マリーシアの緊張はほぐれていた。すっかりとはいかないが。

ここを乗り切れば、周囲への、ユルフレーン家の忘れ形見としての顔見せは、一区切りだとラーナツタ夫人は言っていた。

『あまり断り続けるのもねえ……』

『孤立すると面倒ですわね。それに、アデルワント伯爵夫人はほかのご婦人方に対して影響力がつようございますから』

ユルフレーン家令嬢宛ての、数々の招待状を選び分けながら、ラーナツタ夫人とローナはそんな風に口にしていた。

貴族のなかでも、女性たちには女性たちの社会がある。

『そうね、彼女の顔を立てておけば、取り巻きを窘めてくれるでしょう』

これはどうやら、出席せねばならない雲行きだとマリーシアはあの場合で覚悟したのだった。

鏡の中で、ローナの手がてきばきと動いている。マリーシアの髪を結いなおしているのだ。背中のようにある彼女の口は、まったく別の事柄を注意していた。鏡に映っている手は、喋っている口とはまるで別人のもののようにだ。

「お嬢さま、お気をつけくださいませ。今日の来客はアデルワント伯爵夫人がよく知る方たちばかり」

「どうしてわかるの？」

「門の前にいた者が、招待状もあらためずにお嬢さまをユルフレーン家の令嬢だと見抜いたでございましょう？ 家人程度の身分でお嬢さまの顔を知っているはずがありません。ですから……」

「他の客人は、家人も見知っている頻繁に来る顔。知らない顔は私ということね」

マリーシアの頭の回転のよさに満足げに、そうです、とローナは頷いた。

ふと、マリーシアはあの美しい貴婦人を思い浮かべた。

フィンプリース・レプシーヌ男爵夫人と彼女は名乗った。

先だって、皇帝陛下の催した宴でマリーシアの姿を見たのだと彼女は言った。

あの気高い貴婦人も、やはり自分を快く思っていないのだろうか。脳裏に客間でのことを思い返しながら、マリーシアは出されたお茶の器を手に使っていた。

集まった名家の女性たちが、すでに気心の知れたもの同士でお喋りに興じている。人数はさほどでもなかった。

ほど良く採光を調節した部屋に、小さな卓がめいめいに置かれ、椅子に腰掛けたり、横長のソファに相掛けしたりして、気ままに寛げるようになっていた。

マリーシアはソファの真ん中を宛がわれるまま座ったが、顔見知りもいなければ、当然歓談の相手もない。

もてなし役のアデルワント伯爵夫人は、お茶を運んだ召使いとともにいったん席を外している。

沈黙とお茶を嗜む^{たしな}ほかなくて、マリーシアは手にした器に口をつけた。

途端、顔をしかめそうになったのをマリーシアは踏みとどまった。苦い。そして渋い。渋味は、その液体が舌に乗ったとたん、口のすべりが悪くなるかというくらい。その渋味とともに、口腔に張り付くような苦味が咽喉の奥まで伝ってくる。

その一口を飲んだ瞬間、くすりと誰かが笑いを口に含ませたのを感じた。

誰かの、いや、そのとき部屋中の視線をマリーシアは感じた。声なき嘲笑の視線が、首筋や背中、胸のうちを這い回っているようだ

った。

そうか。

マリーシアは悟った。
……はじまったのだ。

より所もなく、ティーカップを手に包む。中身の赤い液体は、見たこともないくらいとても綺麗だったが、少し濁りが多いようにも見える。お茶の扱いを良く知っている証拠だ。きつともとは良いお茶に違いないのに、これほどまでに酷い味になってしまう保管の仕方と淹れ方を理解しているということなのだから。

——— 宮廷での注目は、好意と悪意が恐ろしくはつきりと表れる。特に悪意は注意が必要ね。アデルワント伯爵夫人は……そうね、行ってみないと解らない。けれど、難しかた方だわ。

ラーナツタ夫人の所感から得た印象は、悪いほうへ傾きそうだが……。

カップを置いたマリーシアは、ふと卓に用意された砂糖とミルクを確かめると、たつぷりとカップに注ぎ足して口を直す。

「まあ、こんなに良い茶葉にミルクとお砂糖ラールを入れるなんて。アデルワント夫人がせっかくご用意くださったのに」

隣に座った同世代の少女が見咎めた。まるでマリーシアがそうするのを待ち構えていたかのようだ。事実、ミルクと砂糖を入れた磁器を、罨の様に彼女は見張っていたのだろう。

「そんなつもりでは……」

確かに迂闊だったかもしれない。そう思うと、揶揄も注意されたように聞こえる。

「ユルフレーン家のマリーシア様ね。私たち、あなたにお会いするのをとても楽しみにしていたのよ？」

会話を聞きつけた別の少女が、近寄ってきてソファに掛けると親しげに話しかけた。

それを皮切りに、周りの貴婦人たちが集まってくる。年齢はマリーシアと多少前後するくらいが多く、逆にアデルワント伯爵夫人と

同世代の女性は少なかった。

「ご趣味はなに？」

「いつもはどんなことをしてらっしゃるの？」

「お庭の花壇を……」

「土いじり？ お花の世話をしてらっしゃるのね」

「いいえ、畑を耕して野菜を作ってらっしゃるのに違いありませんわ」

矢継ぎ早な質問と、マリーシアの発言に言葉をかぶせて主導権を与えない。

「下々の使う肥料って、臭いのよね。どうしてかしら」

「いやだわ、ご存じないの？」

「お茶の席でそれをおっしゃらないでね」

「でも、言われてみれば、少しそんな臭いがしませんこと？」

怪訝な顔で辺りを見回したその娘は、扇を開いて顔を隠した。扇からは、香水のかおりがふわりと広がって消える。

「まあ、失礼ですわ」

「気になさらないでね。貴族の身分に戻られて間もないのだから。ついた臭いが取れなくても仕方ないわ」

そう言いながら、ドレスが触れそうなほど言い寄ってきた少女が、あからさまに隙間をつくる。

「染み付いて取れないのかもしれませんが？」

「あなたも、マリーシア様にあまりなれなれしくすると、高貴な臭いがうつりますわよ」

最初に避けた娘が別の少女の袖を引く。

マリーシアが中心のように集まりながら、彼女たちがほんの少し作った隙間は、新参者の少女を孤独という檻で囲うようだった。

暗に嘲けりを含ませた上品な笑い声と視線が、作られた隙間から存分にマリーシアを撫で回す。檻の中で、マリーシアの心は裸で、ドレスは心を守る鎧にはならなかった。

今までに感じたことのない羞恥心だった。

ただ、そんな中でも、良かったとマリーシアは思えた。だって、ここでは自分がどんな失敗をしても、ヴィスターク兄さんやユルフレーン家を失脚させてしまうようなことには繋がらないから。ユルフレーンの名を貶めないようにだけ、気をつければいい。

だから、彼女たちの言葉には耐えられた。

そもそも彼女たちの言うようなことがあるわけがない。でも、とてもにおいの強いものを扱うこともあるし、何より彼女たちはそういうものには触れず、香水や花々の中で人生を送ってきた人たちだ。もしかしたら、マリーシアには解らないにおいを感じるのかもしれない。ラーナツタ夫人やローナは、ただ優しいだけで、真実を言わないだけなのかも。

そう思うと、心細くなる。

なにか反論できるのなら気も紛れようが、高貴な女性ならこういう時どうするだろう？

初めての宴のときは、向けられる好意をそれらしくご辞退すればよかった。でも、悪意を跳ね除けるなんて、いったいどうすればいいのか想像もつかない。

わからなくて、ただこの視線に耐えるしかなかった。

そのとき、檻であるかのように思われた隙間を、真の貴婦人がすっと通り抜けた。そこが、彼女のために作られた空間のように。

マリーシアの隣に座ったのは、あのレプシーヌ男爵夫人である。

周囲はあつけにとられた。

もちろん皆、来客のなかに彼女の顔があることは認識していた。貴族の女性社会で、アデルワント伯爵夫人と並び立つ人物なのだ。しかし、今日この場の主は伯爵夫人であり、レプシーヌはまるで、舞台の袖に隠れているかのように存在感を消してしまっていた。

その名高い女性が、いまや舞台の中心にいる。

レプシーヌ男爵夫人は、わき腹を抱きすくめるようにして、マリーシアの首もとに顔を寄せた。同じ女性の彼女からしても、マリーシアの腰は細くかよい。

「そうでしょうか。彼女はとてもいい香りです」

彼女の大胆な行為に、少女たちは顔を赤らめた。

「それに、お茶についても明るいようね」

彼女は、自分の為のお茶をみずから注いで、一度口にした。

そして、ミルクの入った磁器の温度を手で確かめると、フィンプリース・レプシーヌは、マリーシアを真似て砂糖とミルクをたっぷり注いだ。

「どうしようもないお茶だけど……」

きっぱり言い切ったレプシーヌ夫人に周りの娘たちはややどよめく。

「アデルワント夫人はちゃんとミルクをほど良い温度にして用意してくださっているわ。もちろん、若いあなたたちの為に、お砂糖もね」

マリーシアは、近い距離に座るレプシーヌの言葉を、見入るように聞いていた。

「実のないご機嫌取りより、素直にお茶を楽しめる友人であるかどうか」

合格はいったいどちらか、明らかであった。

そこへ、計ったようにお茶会の主が姿を見せた。

「皆さん、お詫びいたしますわ。召使いの手違いで、傷んだお茶をお出ししてしまいましたの」

申し訳ございません、と新しいお茶を運んだ女の召使いが深々とお辞儀をしたが、彼女は間違いを犯して恐縮している風には見えなかった。もちろん、伯爵夫人が言い含めた、舞台演技のひとつであった。

シルヴェンライン帝国に、短い夏が近づいている。

季節に見合った豊かな日光が地上を照らし、人々の脳裏から厳しい冬を忘れさせた。

制服のしたで肌が汗ばむを感じつつ、レイトリは日常の勤務の時間を過ごしていた。それは絶対服従の上司に連れまわされる夜宴に比べれば、あまりにも日常すぎて気も緩みがちな午後だった。

ロンテスキンの街角に、直立不動で立つ。もしくはきびきびと歩く。

衛士は警備兵でありながら景観の一部であり、だらけることは許されない。

あくび一つで鉄拳一つ。

居眠り一つで減棒ひと月。

失態ひとつで首ひとつ。

そんな風に歌われるくらいだ。預かる場所が貴族ばかりの町であるから、その厳しさは近衛騎士並みであった。

とはいえ、人も疎^{まば}らなこのロンテスキンの昼下がり。幾分暇つぶしは必要だった。あくまで頭の中で。

槍の尻を石畳に突き、気を付けの姿勢を保ったまま視線を空にやる。

そういえば、妹のシュテフィン^{シュテフィン}は、今日はお茶会のお世話だと言っていた。

失敗をして奉公先の奥方に叱られなければ良いのだが。

さほど、距離の離れていないところで働いているはずの妹のことを、レイトリは慮^{おぼ}っていた。

お茶会は、ちょっと変わった趣向で始まったようだった、と彼女

は、日常とは少し違う仕事風景を楽しんでいた。

奥様のいいつけで、手違いを装って謝る振りをさせられたけど、奥様は、ごめんなさいねと気遣い、お菓子と、お給金とは別のお小遣いまで下さって、本当に自分が失敗をしてしまったのではないのだと分かると、気にはならなかった。

そして、今日の主賓だと聞かされている令嬢の前に、お茶を淹れ直した、薄紅の薔薇を描いた陶磁器のポットを置くと、同い年ほどの少女は、ありがとう、と綺麗な微笑みを見せる。自然と笑顔を返してしまった。

それから、新しいお客様をお出迎えに玄関へ。

玄関に通されて待っていたのは、黄金の髪の美しい貴公子と、どこか冷たい感じのする貴族の殿方だった。

「お待ちせいたしました。ご案内します」

お二人をご案内するとはかり思っていたのだけれど、黄金の貴公子が、もうひと方に目配せすると、そちらの方は帰られたようだった。なにかまた違う趣向があるのだろうか。

「さあ、案内を頼むよ」

高貴な方の多くは、召使いに声など掛けないが、この方はそうでもないようだ。

「はい、カナン・フォスバール様、こちらへどうぞ」

来客の方のお名前は、あらかじめ聞かされている。そういえば、聞かされた名前は一人分だったつけ、と思い返した。そしてとても美男子だということも、教えられていた。

美しい貴公子に出会っても、けして浮かれたりはしない。だって、この方々は住む世界が違うのだ。心境としては、立派な美術品を傷つけないように丁寧に、少し冷めて距離を保つのがいいのだ、と年配の召使いに心得を聞いたことがある。

聞いておいて良かった。そういう含められてなお、とても存在感のあるお方だった。

「カナン・フォスバール様がお見えです」

皆様がお集まりの部屋の入り口で、奥様を始めお客様方に告げる。ここから先は、用がなければ立ち入れないのが召使い。つまりは別世界との境界だ。いつもはお掃除や片づけをしている部屋。見えないわけでも、触れられないわけでもない。ただ、高貴な人たちが醸す存在感に、立ち入れないのだ。許しという呪縛からの解放を与えられない限りは。

あの少女は、広い部屋の真ん中のソファにいる。際立って美しい貴婦人が庇護を与えるかのように、隣に座っていた。そんな女性が隣にいるにもかかわらず、その少女も可憐で愛らしく、かすんで見えたりはしない。

この方が、ユルフレーン家のマリーシアさまなのだ。

マリーシアさまが邸に到着するまでの間、ほかのお客様にお茶をお出ししたりしていたら、いろんな噂話が耳に入った。みんな、庶民出のマリーシアさまを目の仇にして、悪口ばかり。

そんな悪い方には見えないのだけど、同じ平民だったからという最^{ひいきめ}賈^{ひいきめ}目なのだろうか。

カナン・フォスバール様が奥様に招かれて入っていく。いつまでも入り口で突っ立っていたら叱られてしまう。

早く厨房に戻らなければならなかった。

外では陽射しが強まったようだった。

室内の明るさが増したように思える。けれど、日の光をうまく入れる工夫で、室温は快適だった。

きっと温かいお茶がおいしだろう。

召使いの少女が新しいお茶を運んでくれて、ありがとうと言うと、彼女は笑顔を返してくれた。同じくらいの年だろうか。

おかげで少し肩から力が抜けた。そもそも、声を掛ける余裕を与えてくれたのは、隣に座るレプシーヌ男爵夫人だ。

「新しいお茶を、いかがですか？」

マリーシアは淹れ直されたお茶をレプシーヌ男爵夫人に示した。召使いの少女が、古いお茶の入った器を新しいものに替えていたので、中身はからっぽだ。

「いただくわ」

頷き返して、マリーシアは二人分、お茶を器に注いだ。

ようやく、少しはお茶を楽しめる心地だ。

二人とも、今度は何も足さずにお茶を口にする。

「やっぱり、丁寧に淹れたお茶は違うわね」

「はい」

さしものレプシーヌ夫人も、自然と微笑が浮かぶのをとめられない。自分の心境を客観視して、改めてフィンプリース・レプシーヌはマリーシア・レ・ユルフレーンを見た。

少女が微笑み返す。

冗談めかして、護衛の騎士に『肩入れしたくなる面立ち』などと話したが、彼女にとってもマリーシアの謙虚さや礼節を弁えている態度は好ましかった。

マリーシアもまた心強さを感じていた。男の人たちが言うなら、これを百万の味方を得た気分ということなのだろうか。自分を快く思っていない貴族の令嬢たちに囲まれて、こうも悠々とお茶を楽しんでいるのだから。

「マリーシア、あなたは不思議な魅力があるようだわ」

「私なんて、とんでもない。フィンプリース様こそ、とても素敵なお方です」

「まあ、名前で呼んでくれるのね」

「失礼でしたか？」

「いいえ、嬉しいわ。私を前にすると、なぜか遠慮する方が多いのよ」

不敵な表情は、自分が相手に与える存在感の優越を自覚してのことだった。それで気圧される相手など、友とするには不足だ。それは傲慢さからではなく、精神的に対等でなければ、その友情は不幸

ではないかと思うからだ。

「でも、フィンプリースなんて、大仰な名前。大貴族か、まるで王族ね」

自分の名前を思うたび、レプシーヌ男爵夫人は父親のことを思い出した。貴族でもなかった父親は、上昇志向が強くて、娘を文字通り貴族に売り出すのに躍起だった。それを卑下はすまい。そのおかげで今の自分があることは確かなのだ。ただ、それは悲しいことなのかもしれない、とは思ったが。

「……かといって、一般的な愛称のプリスでは、わたくしには可愛らしすぎるわ」

「そんなことはありません！」

語気が強くなってしまったことに恥じて、マリーシアは頬を赤くした。

頬と同じくらい赤い紅茶を、気を落ち着かせようとマリーシアは口につける。

きっと野原に放てば天真爛漫な少女に違いない。それこそプリスなんて愛称は、彼女の方こそお似合いなのだが。レプシーヌ男爵夫人はそう思った。

そこへ、召使いの少女が新たな客人の来訪を告げた。

新たな来訪者の顔を見て、体を硬くしたのを隣にいたレプシーヌ男爵夫人は感じ取った。

——— シリス・カナン・フォスバールか。

雲行きの怪しさに男爵夫人は表情を引き締める。

が、苦虫をつぶしていた貴族令嬢たちは、逆に色めきたった。

レプシーヌ男爵夫人といえば、アデルワント伯爵夫人とは双壁をなす人物だ。令嬢たちは、伯爵夫人に与するとはいえ、レプシーヌ男爵夫人にも憧れがある。それを独り占めされたのだから、マリーシアへの負の思考に拍車が掛かろう物だ。

だが、そこへ新たな潤いたる貴公子がやってきたというわけだ。

「シリス卿、おいでになるとは思ってもみませんでしたわ」

レプシーヌ夫人の声は、社交の場の礼を失せず、悪意も拒絶も感じられない。だというのに、彼をある一線から寄せ付けぬようにする盾か、ゆっくりと突きつける冷たい刃のようにその言葉は聞こえた。

「ご婦人がたの席にお邪魔するのもどうかと気兼ねしましたが、アデルワント伯爵夫人のせつかくのお誘いですから、ご挨拶に伺ったのです」

「シリス様とご一緒出来るなんて嬉しいですわ」

年若い令嬢たちが彼を出迎える。はしたなくないようにと、精いつぱい貴婦人を気取って彼を案内するが、声が高くなるのは抑えられないようだった。

「シリス様、こちらにいらして。お茶をお入れしますわ」

あつというまに、彼のための椅子とテーブルが用意される。もちろん、マリーシアとは距離を置いたところへ。マリーシアとすればありがたい限りなのだが。

シリス、彼の目に留まらないでいられればよい。できることならこの場から立ち去りたかったが、新参者がお開きでもないのに帰るなんて、そんなアデルワント夫人の顔に泥を塗るようなことをすれば、貴族の女流社会はユルフレーン家の女に厳しくなるだろう。

「楽しんでいただけているかしら」

殿方を若い娘に任せたアデルワント夫人は、マリーシアの向かいに座った。

実のところ、お茶の香りが分からなくなるくらい、マリーシアは動揺していた。

あの舞踏会の夜の、庭園での言葉の駆け引きの失敗はいくらでも取り繕えるものだけど、マリーシアの嘘の衣をすべて剥ぎ取ってしまいそうな彼の瞳と、紡ぐ言葉は、とても恐ろしかった。

やがて、自分という糸口から、身の回りの人々を不幸にしてしまいそうで。

「マリーシア、今日は来てくれて嬉しいわ。あなたのお祖母様のラ

ーナツタ様や、お母様のアスリンとも私はお知り合いだったの。親しくさせていただきたいと思っていただけ、一六年前の不幸があつて、それも叶わなくなつてしまつて……とても悲しかったのを覚えてるわ」

アスリンとは、ユルフレーン家での偽りの経歴であるところの、亡き母の名前である。それでも、不思議と懐かしみや悼む気持ちは、母に対する感情としてマリーシアの心に自然と湧きあがつて来た。

「母は、どんなひとでしたか」

マリーシアは訊いた。マリーシアは、生まれてまもなく市井に預けられて母を知らないということになっている。でも、本当に知りたいのは、本当のお母さんのこと。幼いころ流行り病で両親を失つたマリーシアには、ほとんど父母との思い出がなかった。ただ、なまじそのぬくもりを知っている年齢であつたために、寂しさばかりが募つた。

「そうね、小鳥のようなかわいらしい方だったわ……本当に残念だった」

思い出を脳裏に描く夫人の表情は、嘘ではないと思ひたかつた。本当の母のことを思い出しているわけではないと分かつてはいても、亡くなった人への思い出を偽るのは、悲しいことだと思ふのだ。

「だから今度ぜひ、ユルフレーン家の皆様をお招きしたいわ。夫も、一族ぐるみで親しくさせて頂きたいと言っているのよ？」

一聞したままの、あたたかい心遣いを、マリーシアは素直に受け取っていた。

「ああ、そういう事なら、私が友誼の場を取り持ちましょう」

そこへ、少女たちの相手をしていたシリスが耳ざとく口を挟んだ。少女たちの囲いを、花を傷つけぬような身のこなしで歩み寄ると、アデルワント伯爵夫人の座るソファの背に手について輪に加わる。その手は夫人の肩にあるがごとく、声はより耳元に近く、少女たちは羨望の眼差しを送る。もちろん、それで浮き足立つ伯爵夫人ではなかつたが。

「まあ、フォスバール家に取り計らっていただけるなら、我が家とユルフレーン家の友情も深まるというもの。縁のある方々もお呼びして、盛大な宴にいたしましょう」

「それはよい。過去の悪夢も、喜ばしい出来事で癒えることでしよう」

アデルワント伯爵夫人の申し出は、心温まるものであるはずなのに、なんだか、知らないうちに話が進み出している。ユルフレーン家の事柄を自分が決めてしまっただけではない。そう思い、マリーシアは口を挟む隙間を探して声を出そうとした。

そのマリーシアの手を、肩を寄せるレプシーヌ夫人の手が強く握って制止した。マリーシアがそちらを伺うとレプシーヌ夫人と目が合った。彼女は改めて制止の意を、かすかに首を振って示した。

お茶会で危機感を募らせたのはそこまで。あとは楽しい集まりという、表向きの体裁を貫いた茶会であった。どちらかというと、マリーシアとレプシーヌは輪の外にいたのだが。

「それはようございました、お嬢さま。レプシーヌ様に感謝をしなければなりません」

とローナは言った。

帰り道がてらの散策で、マリーシアはローナにレプシーヌ男爵夫人の事を話した。彼女がマリーシアの発言を制したことについてを特に。そこに、マリーシアの知らない宮廷の習慣なりを感じたからだ。そのローナの感想がそれであった。

「カナン・フォスバール家というのは……」

アデルワント伯爵邸の門を、騎士を従えて後にする姿があった。「強い少女です。いや、真に貴婦人たるの資格ありということでしょうが……貴女のように」

背中から、フィンプリース・レプシーヌに語りかける者がいた。濁りのない透き通った音。シリス・カナン・フォスバールの声であることは疑いようもない。

「強い……そう、あの子は強いかもしれないけれど、傷つけられる心はとてもつらいはず。そして、その傷あとは少しずつ残っていくわ」

彼女はシリスのほうを振り返って質問を突きつけた。

「あなたは、彼女を追い詰める為に来たのかしら」

日が傾いていた。斜陽を帯びた金色の神が神々しい。レプシーヌは忌々しげに目を細めた。

「そんなつもりは。彼女に、ここが敵地であることを教えてに来たのです。私がアデルワント伯爵夫人の招きで訪れることによって」

そして、背後にあるものも見えてくるはず、と彼は付け加えた。

「不思議なことをおっしゃるのね。あなたはその背後にいるアルター公に与くみしているのではなくて？」

シリスの考えはアルター公の意に反しているのではないか。そういう指摘だ。だが、黄金の貴公子はこともなげに受け流した。

「そのとおり。ゆめゆめお忘れなきよう」

その日の、まだ太陽が高いところにあった頃、職務中のレイトリ・フェナーは、つつがなく交代、休憩の時刻を迎えようとしていた。担当する区画を巡回し、街の安全を見守る為に立つ。何事もなければそれで終わる仕事のはずが、最近はその後も何かと用が多い。今宵も宴に借り出される予定である。

さしあたって日中の当番は平和に終わりそうだった。

「あろう」

と、呼びかけられる声にレイトリは振り向いた。

この外苑ロテスキんに居る人間の種類は少ない。なぜなら、ここは貴族が安全に平穏を楽しむ為に作られた街だからだ。従って、滅多に出会うことはないが、出歩く人の多くは貴族であり、そのほかは使用人や御用達の店々の商人や職人だけだ。こちらは用がなければ街をぶらつくこともない。

そこでレイトリが出会ったのは、あまり見かけない人種であった。

「なんでしょうか」

まず、その人種を見定めるまで丁寧な口調は崩さない。

「あの、ヴェネルセン伯爵のお邸をお尋ねしたいのですが」

「失礼ですが、どのようなご用件ですか」

職務上の質問が口を突くのは厳しい教育のおかげだ。

「ああ、僕は画家のユットー・オプテルモーといいます。ヴェネルセン伯爵には先日結婚されたご子息夫婦の肖像画を描くために呼ばれてまして」

なるほど。この青年の両手にある革靴や、背負っている布の袋は画材なのだろう。特に背中の鞆からは、大きな道具が収まり切らずにはみ出しているし、油絵の具らしいにおいが鼻についた。

それにしても、画家とはこうしたものだっただろうか。レイトリは自分の持っている印象との落差を、職務上の疑念と結び付けるべ

きか悩んだ。つまり、彼の衣服はところどころ絵の具がこびりつき、生地はすり切れ、あるいは埃っぽく、ありていに言うところ裕福ではなさそうだった。

「いやあ、まだまだ駆け出しでして。この仕事もたまたま紹介があったから舞い込んだわけですよ。この仕事で、伯爵家のお抱え画家になれば、ご想像するような画家姿になってみせますがね」

「いや、そんなことは……」

「顔を描くのが仕事ですから」

レイトリは思わず口元を隠した。顔に出ていたようだ。

「いえいえ、普通の人なら分からない程度ですよ。それに、想像つきやすいですから。僕の印象って」

画家の言を否定しがたくはあったが、ひとつの礼節として顔に出さぬよう心がけつつ、レイトリは彼をヴェネルセン伯爵邸の方向へと促がした。わかり易い通りまで送るつもりだ。

「こうしてまともな肖像画を依頼されるのは久しぶりなのです。仕事がないと、依頼の選り好みをしてはいられないのですが、何でも受けていると、変り種の依頼が何故か寄り集まるようになってくるようになってしまいました」

彼は朗らかに自分の仕事事情を世間話として提供した。他人と友好関係を育むのに苦労しない性格のようだ。そういう人格は、およその場合好ましい。

「まあ仕事があるだけありがたいのですが、ときどき、亡き夫の、あるいは亡き妻の肖像画を描いて欲しいと泣きつかれるんです。参考にする肖像画が一枚もないのにですよ？　まあ、だからこそ故人の絵を欲しがるのでしょうが。そうです、そのとおり。もうまったく僕は描くべき相手の顔が分からないんです。依頼者の説明や、親族の似ている方を呼んでモチーフにしたり。そんな仕事を請けていると、ついには自分の理想の相手を絵にして欲しい、それをみて実際に花嫁を探すんだというお方まで……いや、名前は言えませんが、まあ理想とする方の特徴を人に分かってもらえば、誰かに探しても

らうなり紹介してもらおうことも容易でしょうからね。理想の相手といえ、見合い相手に贈る肖像画を、見目良く描いてくれというのはよくある話で……」

澱みなく経験を語る画家の足と口が止まった。先を行くレイトリの足が止まったからだ。

ああ、よくあることなのだ、と彼は心中で省みた。世間話のつもりが、ぺらぺらと気づかないうちに人の気分を害していることがよくあるらしいとは、彼が最近気づいたことだ。実は、内容よりいつまでも止まらない世間話それ自体に辟易されることが多いことを、彼はまだ気づいていないのだが。

「画家さん」

「ユットーです」

「ユットーさん」

「いえ、気軽にぜひユットーと呼び下さい。私も平民の出ですの
で」

衛士の青年が、画家という職業からでは推し量れない身分を気にして、丁寧な姿勢を崩さないのは理解していた。

「じゃあ、ユットー」

途端に態度が砕けたのは口調で分かった。

「なんでしよう」

なにを怒られるのだろうと、ユットーは怖じ気づいた顔で聞き返した。身分差の配慮を取り除いたのは自分自身だが、それを利用することを思いつかないのが彼の人のよさである。

「俺が特徴を言えば、この場にいない人間の顔も描けるってことか
？」

ユットーの心配は杞憂だった。

「はあ、まあ嘘は言ってませんから」

「描いてくれ！」

あの男の絵があれば、面通しに自分が引っ張りまわされることもなくなるはずだ。レイトリの願望はそこである。

「あとう、ですが画材というのなかなか高価でして……」

ひとのよい人間が、他人に気を遣いながらも我を通す為に、せめて遠隔的に頼みを断る手法は、魔法の言葉で打ち消された。

すなわち。

「そこをなんとか！」

がっしりと肩を掴まれ、断りきれないのがユットーという青年だ。

小一時間。レイトリと、そしてユットー自身の予想に反してさらさらとその人物の顔は描き上がった。

画材については、ユットーが恐れていたほどの損失ではなかった。レイトリが要求するのは、絵画としての完成度ではなく、小さな紙片に顔かたちが分かれれば良い程度のものだったからである。

レイトリは絵というものが技巧を凝らした職人の所業であると思っていたから、まさかその場でユットーが描き始めるとは思っていなかった。

しかしなるほど、絵の具を使った巧妙な技でなく、簡単な線画で充分だと、ユットーの木炭が輪郭を描いていくうちにレイトリは理解した。ユットーが手に持つ細密画用の細い木炭を芯にした筆が、レイトリの語るつたない言葉を形にしていた。

「ユットー、この礼は必ず！」

ヴェネルセン伯の邸の前まで案内してくれたレイトリの表情を見て、気も晴れやかにユットーは彼を見送った。

完成した紙片を手にしてレイトリはロンテスキン公館に走った。

この紙片はまさに免罪符。これで緊張極まりない上司のお供を辞退できるに違いなかった。

少し早い夕食のはじまりは、さながら国家の命運を左右する会議のようであった。

それは名門の家名とは裏腹に、ラーナッタ、マリーシア、そしてローナ、女三人だけのごく家庭的な食卓だった。

ラーナッタ夫人はお茶会の成り行きを耳にして、ため息のように感想を洩らした。

「シリス・カナン・フォスバール、彼が動くとはねえ。まあ、彼がいちばん、マリーシアに興味を持つべき立ち位置なのは間違いないけど、耳にした風聞ではあまり世事には執着のない性格かと思っていたわ」

シリスという貴公子は、優れた容姿と血筋で知らぬもののない人物だ。彼の振る舞いは、細やかな事柄にいたるまで話題となった。その風評によれば、まるで茶飲み友達の所に顔を出すような態度で、貴族たちの派閥に交わったかと思えば、これといって今の境遇に不満がある風でもなく、世情に流されるまま飄々と身を任せている。

一度たりとも、この青年にぎらついた野望は垣間見えなかった。ある意味、ラーナッタは感心もしていたのだ。

危ういカナン・フォスバールの家名を背負ったこの青年のことを「その、カナン・フォスバールというのはいったいどういう意味を持つのでしょうか」

マリーシアは疑問を率直に述べた。

「シリス・カナン・フォスバール。このカナン・フォスバール家というのは、一代限りの、公爵や王に匹敵する、帝室の傍流となった方に与えられる称号のような家名なのよ」

ラーナッタ夫人は説明の必要を感じて、まずはひとつの事実を告げる。

「帝室の、傍流？」

孫娘が傾注すべき言葉を的確に拾ったのを頷いて、夫人は続けた。
「先々帝陛下、つまりヴィスターク陛下の父君は、在位にあらせられた頃、第一子に男子、つまり先帝陛下ね。そしてそのあと三人の女子がお生まれになったの」

その後、先々帝が先帝に譲位し、安定した治世はつつがなく受け継がれた。

先帝が位についた時、すでに齡は三十を越えていたが、それまで皇太子妃との間に生まれていた子供は女児ばかりで、跡継ぎたる男子はいまだ生まれていなかった。一方で、先々帝は年若い第二后妃との市井での生活で、ヴィスタークという子を儲けた。

そこへ先帝の崩御である。

帝国法は、女帝の可能性を否定していない。だが、人々の認識として、男児がより後継者として勝った。

帝国の制度では、三番目の皇女の子までに、皇位継承権が与えられた。

この時代でもまだ当てはまるが、かつては女児のほうが健康に育つ傾向がより如実であった。そのため、後継者たる皇子が潰えた場合に加え、皇女の子の代までを継承順位として数えたのである。

ただし、後継者争いが暗い方向へ突き進まないように、三番目の皇女までと制限を加え、それも当代の皇帝に子ができるまでの間という限定がなされている。つまり、継承順位を簡略にし、継承権を持つもの同士が互いに眼を光らせ、世間の目に利害関係を明らかにしておくことで、暗殺などといった血みどろの争いを防ぐ意図が含まれているのだ。それでも、長い歴史の中で帝室の不審な死については枚挙に暇がないが。

先帝が崩御したとき、当然ながらその娘たちに帝位継承権はあった。

だが、能臣たちの心うちでは、先々帝の子の中で、先帝の妹である第一皇女エリーデの息子、あるいは第二皇女や第三皇女の息子ら

に期待する向きが大きかった。彼らの帝位継承権は、直系の子が生まれている時点で消滅しているにもかかわらず、だ。それは国を憂う能臣の未練であった。

「この第一皇女エリーデ殿下のお子が、シリスというお方なのです」
ローナも主人を手伝って説明した。

第一皇女エリーデは、三六公国のひとつローズロント公と結婚し、唯一恵まれた子宝がシリスであった。

「でも、今の皇帝陛下はヴィスターク兄さん……どうしてなの？」
「そこね」

ラーナツタとローナは頷く。

「帝位継承権は、皇帝に在位されている方の指名が何より第一位として数えられるわ」

「普通、皇帝とられるお方の父君というのは、すでに亡くなられているものでございましょう？」

二人の言葉は、やや説明の順序が違っていた。二人は顔を見合わせて、夫人がローナに譲る形となった。

「実は、先々帝陛下は、先々々陛下なのですよ」

マリーシアがきよんとするので、二人は笑みをこぼした。

「ヴィスターク陛下のお父上は、譲位した帝位に再びお戻りになったのです。普通、皇帝陛下のお父君というのは亡くなっていらっしゃるのが普通ですから、継承権の順位について、帝国法にもこれに関する文言がまったくありません。ただひとえに、崇拝されるほどの先々帝陛下の実力を以って認められたことなのです」

「そう、そして、改めて皇帝とられた先々帝が、次期皇帝としてヴィスターク陛下をご指名されて、譲位なさったの。だから、正確にはヴィスターク陛下のお父上は、先帝であり、先々々帝でもあるのだけれど、あくまで手続き上のことだから、ヴィスターク陛下の異腹の兄君を先帝、現皇帝陛下と先帝陛下のお父上を先々帝と御呼びしているのよ」

そこまで言って、ラーナツタははっと大事なことに気づいたよう

な顔をした。

「あら、少し話がずれてしまったかしら」

「奥様が、面白いことばかりを優先なさるから」

「だって、食事は楽しい会話のほうがいいわ」

「まあそんなわけで、法に照らしても恥じることなきよう、配慮して先々帝陛下はヴィスターク陛下を皇帝陛下とされたのですわ、お嬢さま」

マリーシアは話を飲み込む為に、二人の言葉を脳裏でなぞる。

「じゃあ、シリス様の現在の帝位継承権は？」

その問題に気づいたことに、ラーナッタとローナは内心で感嘆していた。

「そうね、一番大事な話だわ。茶化すのはやめましょう」

ラーナッタ夫人はナイフとフォークを置いて居住まいを正した。

「カナン・フォスバールや、それと同様に一代限りの称号を持つ方の継承権は、時の皇帝の子孫より継承権が下になるわ。たとえば、皇帝の子孫に男児がいなくても、ね。だから実質、その時の皇帝に子供が生まれた時点で、傍流であるカナン・フォスバールという人物の帝位継承権は消滅する仕組み」

これらはすべて、先に述べたように帝位継承権を簡略化し、後継者争いの激化を抑える法であった。

「シリス・カナン・フォスバール様は、先々帝陛下の孫にあたりますでしょう？」

マリーシアは頷く。

「先帝陛下に、お子様が出来た時点で、実はシリス様の帝位継承権はとっくに消滅していたのですが……」

当代の皇帝に、直系の子供が生まれると、傍流の継承権が事実上消滅する、という仕組みに当てはまる部分である。実際には、シリスが一歳のときに先帝に娘が誕生したので、彼自身に自覚はないことであるが。

先帝が崩御したとき、帝国宰相コルトスをはじめ、能臣たる人々

は苦慮した。先帝の娘たる皇女を、安易に女帝として立てれば国が乱れる。帝国法は直系がいる場合はこれを第一とする定めだが、幸いにして先帝の父が存命であることにコルトスは目をつけた。

今でいう所の先々帝が、再び現皇帝となれば、孫に当たる男子は直系と見ることが出来る。つまり、先帝の甥、すなわち傍流にあたるシリスやそのほか同様の男児の幾人かを、皇帝の直系に引き戻せるわけだ。手続き上、先々帝に再び即位願ひ、その男児の中から次期皇帝を選ばばよい。

そうして、市井で身分を隠して暮らす先々帝を訪れた結果、彼は孫ではなく新しい息子を皇帝に選んでしまった。

シリスというヴィスタークと同世代の青年は、知らぬところで傍流から皇帝の直系へと時を遡り、そして再び傍流となったのであった。

ただし、今度は傍流でも、帝位継承権を残している。

現皇帝ヴィスターク五世が、まだ直系の子孫を持たないからだ。

すっかり食事の進まなくなった三人は、話の続きを食後にすることにした。

片付けを終えて、お茶を運んだローナも交えて話は再開された。

「つまり、シリス・カナン・フォスバール様は、ヴィスターク陛下にお子様生まれるまでは、帝位継承権をお持ちなわけです」

「ヴィスターク陛下のお妃となりうる女性は、彼にとってとても重要といえるのよ」

話の主導を任せて、ラーナツタは時折口を挟みながら、お茶の香りを楽しんでいる。マリーシアに、こんな話のさなかにもそれくらい余裕を見せることは、彼女なりの氣遣いだった。

「ですから、野望があれば、現皇帝に近づく女を毒牙に掛けんとする、最たるの人物なのです」

最後のローナの言葉は、脅かしではなく真剣に心配していた。

つまり、マリーシア・レ・ユルフレーンなのである。

マリーシアは、自分が帝位継承権に関わる立ち位置にすることを、強く認識した。シリスだけではなく、彼を取り巻く人々もまた、利害を絡めた目で自分を見ているのだ。

「彼は、自身が生まれたローズロント公家の血を引きながら、帝室傍流としての家名にも、まだ帝位継承権という力がある。だから、彼はある意味でとても恐ろしいわ。社交界で、より人々に近しく、しかも帝室の権威を内に秘めている彼の言動は強い影響力がある。彼の持つ帝室の血を深く捉える人からすれば、彼の意向に逆らう人間を不敬呼ばわりだってするでしょう。それは影響力の一端に過ぎないし、人の意識はもつと難しいのだけれど」

シリス・カナン・フォスボールがユルフレーン家とアデルワント家の仲をとりもとうとする申し出に対して、マリーシアが口を挟もうとするのをレプシーヌ男爵夫人は引き止めてくれた。

丁重に断ったところで、言葉尻を利用されるかもしれない。シリスの申し出を断ったことが広まるだけでも、人々はユルフレーン家について憶測するだろう。すっかり力の衰えた公爵家が、ついに皇帝と親密になり意を強くしたのか、と。

皇帝とシリス・カナン・フォスボールを取り巻く派閥に色を分けて人々は考えたがるはずだ。今そんなところに明暗をつければ、ほとんどがユルフレーン家にとって、敵か、敵か味方かよく分からない人々、この二種類にしか分けることが出来ないだろう。曖昧な区別が多く、しかも味方と言い切れる人々は少ない。

しかし敵は、ユルフレーン家が皇帝の権力を欲しているとみて、はっきりと敵とみなす。

はっきりとした味方を周囲に持たないまま、ユルフレーン家は敵に囲まれることになる。そして皇帝との親密さとは裏腹に、ユルフレーン家は弱体だ。

では、敵ってなに？

マリーシアはふと思った。

ヴィスターク兄さんの敵？ マリーシアはそう考えて首を振った。現皇帝の側につきながらも、その妃を輩出しようと欲する貴族にとってユルフレーン家はやはり敵となる。そんな貴族も、ヴィスタークにとっては味方になる場合だってあるのだ。

必ずしも、ユルフレーン家の敵はヴィスタークの敵ではない。

今ここで、人々になにかしらの色を明確に認識されたら、味方がいないまま敵を作ることになる。そして、それをきっかけに、坂を転がりだすように派閥争いが動き出すだろう。

きっかけは自分。

のらりくらりと、やり過ごすしかない。

寒い季節は終わったというのに、マリーシアは首筋に冷たいものを感じて身を竦めた。

そこへ、すっとお茶が差し出される。

「だいじょうぶよ。わたくし達が付いているわ。頼りなく思うかもしれないけれど」

ラーナッタ夫人は微笑み、ローナは頷いていた。

マリーシアは申し訳ない気がした。むしろ、自分がユルフレーンの人間になったことで、この家を危機に晒しているというのに。

「ほら、気に病まないの。こう見えて、わたくし達は、公爵家を切り盛りしてきたのですからね」

祖母とばあやは、小娘の気持ちなどお見通しだった。

日も暮れる頃、レイトリ・フェナーは帝都にある我が家へ帰宅した。

盛り場には灯りが燈りだし、酒精で疲れを癒そうという男どもが集まりだしていた。肉体の疲れには眠るのが一番だが、心のうさを晴らすにしても、精神の健全な営みのためにも、仲間と酒を酌み交わすのはけっこうなことだ。なかには別の意味で不健全な店もあった。

レイトリは、やや心誘われたが、我が家では妹が待っている。レイトリはこうして外苑ロンテスキンに職を持っているが、妹もロンテスキンにある貴族家へ奉公に出ている、兄の世話の為という理由で、住み込みずに歩いて通っている。衛士にも専用の宿舎があり、通う必要はないのだが、我が家を空き家にするのも躊躇われた。

両親は、十年と少し前、なんでもない病を運悪くこじらせて逝ってしまった。呆気ないものだった。

人が住まないと、家は傷んでしまうものだからと、外苑には毎朝通うことを妹に告げると、妹も家事の面倒を見るために通うと言いつ出したのであった。

我が家に帰ると、妹のシュテフィンがエプロン姿で迎えてくれた。「おかえりなさい、兄さん」

んん、と気のない返事をレイトリは洩らす。衛士隊の帽子と上着を受け取りシュテフィンは兄の世話焼きにいそいそと動き回った。

「さあ、早く服を着替えてくださいな」
ソファにぐったりと座った兄を督促する。

夜のうちに汲み置きの水でお洗濯しないと、シュテフィンはいつも朝早くお勤めに出掛けるから家事が回らなくなってしまうのだ。

「ん……ああ」

気のない返事をしたレイトリの口から、ため息が漏れた。やはり

酒でも飲んで上司の愚痴をだれかれと言わず零してくれば良かったのだろうか。

あの画家、ユットーに頼み込んで描かせた絵を、レイトリはシャツの胸ポケットから取り出して広げる。

喜び勇んで上司のもとに参じたものの、執務室は空で、主の不在を侍従に告げられたのである。

したがって、免罪符は発効しないまま、こうして手元にあるのだった。

「あら、似顔絵ね」

食事までのあいだ、咽喉を潤すためのお茶を兄に出したシュテフインは、その手にあるものに気づいて覗き込んだ。

「似顔絵？」

「違うの？ 最近、たまに似顔絵師が街で描いているわ。舞台の役者の絵を売ったりもしているのよ。特徴を捉えて、少し面白く描くので、ふっと笑えたりしてしまうの。真面目な人が描かれると、たまに怒り出したりもするみたい」

「そうか、似顔絵というのか」

肖像画とは違って、絵としての価値など落書きのようなものだと思うっていたが、なるほど街角の大道芸と同じ、見せ物の類と考えれば、喜ぶ人もいるのかもしれない。自分も子供の頃は旅芸人の見せ物にはしゃいだものだった。

意識がどこかへ振り向いている兄の手から、似顔絵をシュテフインはすっと抜き取った。最初は何気なく見ただけだったのだが、なにか引っかかるのだ。

「あれ？ この方……」

「どうした」

「今日、マリーシア様というお方のお世話をしたの。とっても素敵なんひとだったわ。その方を歓迎するお茶会だったのだけど……」

マリーシア嬢がお茶会に出たというのは初耳だった。そもそも自分自身にそんな情報網が持ち合わせていないのはレイトリも自覚し

ているが、クラウドは知っているのだろうかという疑問が、妹の次の言葉までの間に脳裏をよぎる。

「この似顔絵の方を、お茶会で見たわ」

「なんだって！」

口にしたカップから、お茶が盛大にこぼれた。

日没が暦どおりの時刻を人々に告げる頃、外苑ロンテスキンの外れのとある邸に、続々と馬車が到着した。

その邸は、長い年月でみると主があまり定まることがない。カナン・フォスバールやその他の皇位継承権を持つ称号の持ち主たちが、ある種の時限付きで賜る館であるからだ。離宮とはいかないまでも、帝室にまつわる人間の住まう場所として、ロンテスキンの基準に縛られない広大な敷地があった。それゆえに、外苑の端に位置するのである。

そして、現在の主は無論、シリス・カナン・フォスバールであった。

また一台、馬車が到着する。

カナン・フォスバール家の使用人が駆け寄ると、貴人の降車用の台を置き、馬車の扉を開いて畏まった。

上司の友人という呈で、邸に馬車で乗り付けた衛士ならぬ貴公子レイトリ・フェナーは

庭園の見事さにあぐりと口をあけた。

まるで宮殿である。いや、宮殿の中に入った事はないから、それはレイトリの想像でしかない。事実としては離宮にも及ばないが、見事というのは間違いではなかった。

レイトリは、ふと夜空を見やる。夜闇を打ち消すように満天の星が輝いていて、整えられた庭園は闇の暗幕に隠れることがなく、おかげでレイトリの尻込みを助長した。

これまで貴族の宴に上司とともに訪れたが、こんな場所は一度だつてなかった。馬車で来訪するのも初めてだ。なにせ、ロンテスキンは労を惜しまねば、すべて徒歩で間に合う場所だ。

「どうした、早く降りないか」

上司が背中から急かした。降車用の台に一步足を踏み下ろしたと

ところで、レイトリはその光景に固まってしまっていたのだ。

使用人が、礼の姿勢を保ったまま来客の降車を待っていた。

「は、ただちに」

外に出ると、湿った空気がレイトリの頬に触れた。良い天気なのだが、明日は雨かもしれない。

ユルフレーン家の馬車が、外苑ロステスキンの西端に向けて街路を走っていた。

ラーナッタ夫人が進行方向を背にする座席に。向かいの席にマリーシアとローナが隣り合わせで座っていた。

馬車の中はとても静かだ。

街路は石畳で綺麗に舗装された上、往来が少なく傷みもない。車輪は滑るように走っていた。しかし、マリーシアの心が静けさを感じるのとはそういうことではなかった。

向かいに座るラーナッタは瞑目して押し黙り、ばあやや主人であり親友である夫人の思考を妨げないように車内の沈黙を守った。

ラーナッタ夫人といえど、容易い状況ではないのだ。

マリーシアは自身の心配をラーナッタに悟らせないように、窓に顔を向けた。自分までラーナッタの重石になってはいけない。

外は、見慣れた街路の景色が流れていた。

馬車を走らせれば、ユルフレーン家の別邸からカナン・フォスバールの邸へは、さほど時間は掛からないと聞いた。どこそこの通りを抜けて、と、そんな風に説明してもらった様子では、日頃のお散歩の距離を考えれば歩くのは苦ではない。

だが今回は、きつちりと車を用意し、使用人に御者を任せ、貴族としての格式を整えた。

体裁を保つというのは、恥や外聞に対するものだけでなく、体裁それ自体を礼儀とするときもある。

そして整えるべき体裁のもうひとつが、家門の縁者であった。

カナン・フォスバールからの招待は、アデルワントとユルフレーン、たった二つの家門だけへのもの。

そして、シリス・カナン・フォスバールは両家の友誼の場を取り持つと言ったのだ。

彼の言葉が絶対であるのなら、縁故のある人間は招待せねばならない。血縁は公式の記録に残っているものであるから、誤魔化しは利かない。さりとて、古くから政略結婚で繋がった血の結束は、一部では強固であるものの、古く廃れば赤の他人より冷たくもろい。まして、一躍注目を浴びるユルフレーンである。今、ユルフレーン家に縁故あるものとしてこの宴に参加するということは、現皇帝ヴィスターク五世を苦々しく思っている者たちや、ヴィスタークの皇妃に自分の娘をと目論む者たちの敵であると宣言することになる。つまり、この宴へ参加する事はユルフレーン家の旗印に集う人間だと表明するようなものである。

そしてアデルワント家とアルター公が親密なのは多くの人が知ることだ。

この状況を見て多くの貴族たちは悟っていた。この宴は、アルター公の指図でユルフレーン家に与する人々をあぶりだす意味を持つのだと。

そんな所にこのこと出席し、いまや衰退したユルフレーン家に連なるものと名乗り出て大貴族であるアルター公に胸を張るなど、自分の家門を滅亡へと傾けるようなものだ。

果たしてどれほどの人が、ラーナツタ夫人の招待に応えてくれるだろう。

ユルフレーン公爵家としての体裁を整えられなければ、大いに恥を掻き、名誉を損なうだろう。夫亡き後、家を守ってきた夫人には耐えがたい屈辱のはずだ。

なにより、友誼の場を設けたカナン・フォスバールを軽んじたと他の貴族に糾弾される口実となる。

今後の領地経営の影響もあるはずだし、貴族社会での立場も失い

かねない。

貴族としての礼法作法だけでなく、だんだんと貴族たちのありようを学び、察したマリーシアは、物事を解きほぐすように少しずつ理解し始めていた。

自分という厄介の種をラーナッタ夫人に押し付けてしまったことに、マリーシアは衣装の下胸が痛いくらいだった。

馬車の中の空気は重苦しかった。ヴェネルセン伯爵は不機嫌に違いない。そう思うと、若き画家にとって伯爵と二人の空間は重圧であつた。

彼、ユットーは息苦しさを感じて衣装の咽喉元を開いた。

馬車は高貴な方の邸へ向かっていると教えられた。この衣装はそのためのものだ。

真新しい着飾った衣服の馴染まない肌触りが、ユットーは好きではない。窮屈なお仕着せは、新婚夫婦の絵画の礼金と合わせた謝礼である。

「くれぐれも、失礼のないようにな」

伯爵は、彼ユットーが愛すべき絵画の才能の持ち主であることを一目で見抜いた。真実が見抜いた通りなのか、伯爵がそう信じ込んだだけなのかは、ひとまず置いておくとして、彼には優れたモチーフが必要だった。できるだけ、我が家の外に。

息子夫婦の結婚を記念した肖像画を描くの、さる貴族からユットー・オプテルモーなる優秀な画家を紹介されたのがしばらく前のこと。才能のある芸術家をお抱えとして援助するのも、やぶさかではない。そう思っていた。この画家は、怠惰ではない。援助を受けて途端にそうなる若者を目にしたことがあるが、彼は創作に対する情熱が燃え上がっている時期のようだ。

だが、彼の口も怠惰ではなかった。

筆が動き始めると止まらない手と同じくらい、口も止まらなかった。そして絵に集中すればするほど会話は成立しなくなり、彼の一人語りとなる。時おり彼の口から飛び出す、絵と同じくらいの描写力と鋭い切り口の言葉は、果たして無意識なのだろうか。ほとんどすべての人が、完全無欠の容姿など持ち得ないものだし、性格やらなにやらにしても欠点はつきものなのだ。もちろん、悪辣にそれを

彼が口にするわけではない。

それにしても、正直は悪徳なのではないかとヴェネルセン伯爵は考えるようになった。

そしてよく動き回る。邸の離れに与えた工房を飛び出し、邸や敷地をうろうろと歩き回り、取りつかれたように写生をはじめたり、そのまま油絵の具を取り出して本格的に描き始めることもあった。キャンバスの枠を髪の毛一本分でもはみ出れば途端に不器用になる彼の手は、絵の具をそこら辺に落とし、壁や柱に知らず知らず新進気鋭の色彩を加えてしまい、使用人たちが悲鳴を上げない日はない。

だが、才能はあるのだ。

だから、なんとかせねば。いや、なんとかしてやらねば。もちろん、彼のために。

ヴェネルセン伯爵は同時に思い出していた。さる貴族に、そんな優秀な画家を手放してなぜ自分に紹介してくれるのかと訊ねたとき、形容しがたい理由を記憶に止まらないような掴み所のない言葉の羅列で見事にはぐらかされたのは、つまりそういうことだったのだ。

アルター公ヒルデムは、権力者としての威風を漂わせて、広間に姿を見せた。

場がざわめく。

アデルワント伯爵とアルター公には、古く遡れば血脈の交わる部分があるが、さりとて親戚としてこの場に現れるほど、もはや血は近くない。とすれば、わざわざユルフレーン家一党に敵対の表明と取れる行動など見せずとも、遠くから見下ろしていれば良いだけのことである。

だが、伯と親交の深いものとして、アルター公は訪れた。自ら、皇帝に近づこうとする者たちを威圧するために。彼は策を講ずるのに興じる向きもあるが、小策士ではなく王者の気質に近い人格であった。

「アデルワント伯爵夫人、よく深窓の令嬢を連れ出してくれた」

アルター公ヒルデムは、夫人を見つけて挨拶した。形式上、彼女はヒルデムを招待した立場だ。

「わたくしは、お茶にお誘いしただけ。ヒルデム様がシリス様を差し向けたのでしょうか？」

夫人の声は、かすかに非難の音色を含んでいた。ヒルデムは否定しなかった。

シリスはお茶会に顔を出して、一言、両家の友誼を取り持つと言っただけで、いとも簡単にユルフレーン家の陣容を暴くことに成功したのだ。いや、今まさに成功しようとしている。

「高貴で不幸な方を、良いようにお使いになっっているようですわね」
マリーシア・レ・ユルフレーンをお茶会に誘い出すことに成功すると、そこへシリス・カナン・フォスバールが同席したいと申し出た。それを許し、さらに彼の会話の意図するところを汲み取って、この宴を催すことを同意したのは伯爵夫人だ。

それらの成り行きには、すべてこのアルター公ヒルデムの意思が介在する。

アデルワント伯爵夫人は、カナン・フォスバールという、称号であり家名を持つ彼が、薄氷を踏むような不確かな立場にあまんじて、なおかつ自分を利用するものに身を捧げているように思えてならなかった。

伯爵夫人にとって、ヒルデムは憎らしい人ではないものの、シリスという青年にどこか痛ましい儂さを感じるのだ。

中庭を見下ろす一室。その暗がり、邸の主は椅子の背もたれに身を預けていた。

先刻までは、火灯りの続々と集い訪う様を眺めていた。幼少のころは宮廷で同様の、あるいはそれ以上の眺めを、もっと高いところから眺望したことがある。それを失ったことに激しい喪失を感じた

ことはない。ただ、そうしたものは失われるのだということを、今はよく知っている。

そして、いま集う灯りさえ、思い出と同じ。

冷たい緑の眼は、いまは閉ざした目蓋に秘されている。

思うままに人を動かし、我が名に集う。その名が失せて、残るものがあるだろうか。

心に思うのは、諦観や無常ではない。

ただ、そういうものだとか割り切っているから、心に熱がないのだ。

扉を叩く音で、彼は気だるそうに目蓋を開けた。家令が言葉無く頃合いを告げに来たのである。

彼は背もたれに預けきった身を起こした。

そろそろ、皆が揃うことだろう。この夜宴の客人が。

控えの間に落ち着きなく立っていたレイトリは、宴の席である広間の準備が整ったことを報せる使用人が姿を見せると、一抹の羨望を感じた。

自分の身分からすれば、ああした使用人であったり、表玄関で馬車を誘導するといった仕事をする側の人間であって、こんな宴でもてなされるなどあり得ないことだ。

いいかげん幾度目かの宴ではあるが、慣れたものではない、と思うのがいつもの感想である。

であるから、落ち着いて職責を全うしている使用人が恨めしいのだ。ついでに言えば、こんな任務に引っぱりまわす上司も。

「閣下はなぜ、あのユルフレーン家の令嬢にこだわるのです？」

広間へと続く通路で、レイトリはクラウブに訊ねた。それがこの任務のそもその原因だ。自分がユルフレーンの令嬢のそばをうろつく不審な男を目撃しなければ。その男について、我が上司がこれほどまでにこだわらなければ。

「ふむ」

クラウブは、さほど難しいことではない、という素振りの相槌を打った。

そう、はじめに彼女に興味を持ったのは、かの友人であった。

あの金髪の貴公子はなにを考えているのやら。ただ、彼が赤いカーテンの向こう側の人々に、真に協力を惜しまないというのなら、彼らの首魁はアルター公なのだから、やはり公のために動いているのだろうが、どうにもクラウブにはそれが信じられなかった。

才気に満ち、揺るがない人格は王者たりうる。恐れ多くも現皇帝と比肩して遜色が無い。時代がシリスに味方していれば、とクラウブはそこで想像を打ち切り、忠実な部下に答えを返すことにした。

「なぜ、と言われれば即答は難しいが。話題の渦中のひとだ。その

渦は、富や名声を引き寄せるだろうが、同時に嫉みや不幸をも一緒にくたにして彼女を飲み込むかもしれん。そういう悪い想像をするのだ……」

「すると？」

「美しい女性に味方したくなるだろう？」

レイトリは、かろうじて眉間にしわが寄るのをこらえた。

「それより、しっかりと来客の顔を見ておけよ。この宴に例の男が居る可能性が高い」

「閣下も似顔絵は御覧になったはずです」

それなのに、部下に押し付けてばかりいるのは怠惰ではないか。不機嫌を正当な批判に置き換えることを、レイトリも学んだのである。

「見たはいいが、現実の顔を見てそうだとわかる確証は無い。まあ、似顔絵のできばえは、お前の妹御の目で実証されたわけだが」

レイトリがユットーの描いた似顔絵をクラウドに見せることが出来たのは、妹シュテフィンが似顔絵の人物を目撃したと語った翌日である。

レイトリの報告を耳にしたクラウドは、この宴に警備という理由をつけて出席することを取り付けてきた。警備は名目だけでなく、たしかに邸周辺にも嚴重に衛士が張り付いており、そして内部にもクラウド直近に衛士が必要で、その役割はもはや流れるようにレイトリに回ってきた。

似顔絵はこの仕事から解放される免罪符どころではなかった。ごく簡単な発想の転換をすれば出世の好機に思えるはずなのだが、レイトリにはほとんどん拍子の出世というものが信じられなかった。きつとどこかに落とし穴があるに違いない、と。

「それで、妹御の勤めるアデルワント伯爵家のお茶会に、マリーシア嬢が招待され、そこへシリス・カナン・フォスバールと例の男が現れた、それで間違いないな？」

「ええ、そうです」

溜息を交えながらも、レイトリは素直に周囲へ目を配り始めた。
あきらめも肝心だ。

部下の性根のよさに微苦笑して、クラウドは思考した。
宴は一見和やかな雰囲気が始まるうとしていた。

ただし、アデルワント家とユルフレーン家、水と油が分かれるように両家が交じり合わない形で。

アデルワント伯爵家、シリス、そして例の男。関連性を考えれば、この宴にその男が姿を見せる可能性は高かった。

クラウドは部下同様、客の顔ぶれに目線を流しながら意識は思考に沈む。

それに、今日この場にあの不審な男がいるとすれば、その男はアルター公の派閥の人間であると言い切れる。証拠にはならないが、確実だ。

さて、それを見つけたとして、どうすればよいのか。いかに外苑ロンテスキンの警備を預かるクラウドとて、貴婦人の後をつけていたというだけで貴族を拘束などできはしない。ただ、男を見出すことで進展はある。

男は、マリーシア・レ・ユルフレーンに対してなんらかの行動を起こすときの実行役と考えられる。それを配した派閥を特定しておくのは重要だ。いっそ、シリスに訊けばよいかもしれない。はぐらかされるかもしれないが。逆に、面白いようになにもかも教えてくれるかもしれない。長い付き合いだが、つかみ所はいまだに心得ていなかった。つかみ所の無さと上手に付き合うことが、長い付き合いで習得したことだ。

「レイトリ、気を抜くなよ」

「は、閣下」

背中を向けた二人の会話を、偶然耳にして、ひやりと恐怖に当てられたように肝が冷えたのを覚えた。

己の勘を信じて身を隠す。

まるで主従のような会話、横顔を確認できる位置で息を潜める。

一方は、クラウブ・ロンテスキンだとわかる。

もう一方は、宴の会場を、特にアデルワント家の方を注視している様だ。ちらりと横顔を見ただけでは、即座に誰とは判らなかった。焦りに歯噛みする。嫌な予感がざわざわと胸を悪くするのに理由がわからない。だが、無視するのは危険だ。自分はこうしていくつもの危ない橋を避け、あるいは排除してきたのだ。

誰かを探している……。そう悟ったとき、再び垣間見えた横顔が、こちらを振り向いた。

その時、広間の窓と言う窓から閃光が一瞬だけ差し込んだ。

宴の場の人々が、おお、と、どよめいた。

「遠雷ですか？」

「そうですね。音もない」

来客たちの会話にクラウブも異論は無かった。彼らは明日の天気の話から、当たり障り無く世間話をはじめめるが、クラウブはそれよりも友人を装う部下がしきりに目元に手をやっていることが気になった。

「どうした」

「いえ、誰かいたと思ったのですが、気のせいでした」

振り向いた瞬間、光を眼に入れてしまったので視界が白く霞んで仕方が無い。

クラウブはレイトリの見ていたと思しき方を見やるが、たしかに誰もいなかった。

邸の主を迎えて、宴は始まった。

卓に並んだ料理の蓋が取り払われ、給仕が客人たちに飲み物を配り歩く。

型どおりの挨拶を終えたシリス・カナン・フォスバールが階段から降り立ち、広間の中央を進むと、広間の左右、水と油のように分かれたユルフレーンとアデルワントに連なる人々が彼に挨拶をすべく、繋ぎ合わされるように中央に集まった。

二つの家の当主たるアデルワント伯爵夫妻と、ラーナツタ夫人が、カナン・フォスバールの引き合わせのごとく彼を交えてにこやかに言葉を交わすと、その場の和やかな様相の下に隠れた緊張感が幾分緩んだ。しかし、幾分かだけである。その緊張感については誰も言及はしていないが、その源はアルター公だ。

この宴の背後に立つアルター公と、ユルフレーン家との接触の行方を見守っているのだ。その接触が衝突となるのか。衝突が決定的な敵対関係へと発展するのか。

ユルフレーン側の人々はもちろんだが、アデルワント伯家の招待によって訪れた人々も、迂闊にユルフレーン側と親交を深めてしまうと、今後の展開によってはアルター公のあらぬ疑いを持たれてしまう。身の処し方を誤ってはならなかった。

ヒルデムは控えの間で、使いの者がもたらした紙片に目を通していた。

砂漠でフィンデル王国の王女と、それに従う民衆に遭遇したという、隊商の頭目からの報せを受けて、指示を授けた連絡役を送ったものの、隊商と接触できなかったという連絡を、鳥が運んできたのだった。

邸に鳥が戻ると、家臣が即座に使いを走らせたのだった。急を要する場合もあるので、そのように厳命しているのだが、今回ばかりは面白くも無い内容に失望を禁じえなかった。

燭台の火に紙片をあぶる。火は瞬く間に紙片を食い尽くした。

まあ、あの男ならうまくやるだろう。ただ飼われているだけではない男だ。いつ咬みつくか解らない危うい気概をヒルデムは気に入っていた。そのくらいの野心で動いてくれなければ、こちらの望むような働きを期待できないからだ。

その時、扉が叩かれ、何かから逃れるように男が入ってきた。シブレン子爵キルクである。

「クラウブ・ロンテスキングが、部下を使って面通しをしているだど？」

間違いないのだなというヒルデムの問いに、キルクは頷き、ロンテスキングで顔を見られた衛士に違いないと請け負う。

「始末はつけられるだろうな？」

ヒルデムの問いにキルクは再び頷いた。

「では、今日は姿を見られぬように帰るがいい。私の護衛は不要だ」キルクは、この権力者の命令に異を唱えて護衛に残る忠誠心を発揮すべきか、

不興を買わぬようおとなしく退散すべきかを脳裏で計算した。

ヒルデムには敵も多い。それは権力者の常である。だが、この男が不要といえばそれなりの算段もあつてのことだろう。したがってキルクは口を開かぬまま頭を垂れてその場を退出したのだった。

ラーナツタ夫人は、給仕から果実酒を受け取り、ほどほどに嗜んでいた。宴の空気に身を馴染ませて人々の心を肌で感じるのも必要なことなのだ。ユルフレーン家に嫁いで、とくに当主の座を亡き夫に代わって勤めはじめてから学んだことだった。

長く中央から離れてはいたが、ユルフレーン公国も血族やら周辺

の貴族たちとの関わりのなかで生じる問題から無縁ではられない。夫を亡くした直後は、しかるべき後継者に公爵位を譲るようにという圧力もあった。自分が嫁入りしたばかりの小娘であったのなら、なすがままだっただろうとラーナッタ夫人は振り返る。だが、貴族社会で存分に立ち振る舞ってきた経験が、その時には備わっていた。

ラーナッタは、老いてもなお直系男児の誕生に拘った夫の意志を汲んで、公爵位、ひいては公国の領地をただの利権と見る血族を寄せ付けなかった。

夫は、公国を帝室に返還するも良しと生前から口にしていたし、めばしい後継者が血族にいれば、引き継ぐ準備をしていたはずだ。夫が、それを今際の際まで後継者について口にすらしなかった。夫が、死の床につくまでの間に妻たる自分に語ったことが、彼の思うところの全てであると、ラーナッタは長かった二人の生活のあたたかい想い出とともに確信している。

挨拶の列が途切れると、渴いた口を潤すために給仕から受けとった新しい果実酒をラーナッタは含んだ。

（あら、美味しいわね）

口惜しい。せっかく美味しいものを見つけても、ここではゆっくり楽しめない。そんな心の眩きを洩らすのも、精神に持たせなければならぬ余裕を心得てこそである。

「ラーナッタ夫人、楽しんでおいでですか？」

「あら、シリス・カナン・フォスバール。素敵な宴をありがとう」「いかがです？ 我が家自慢の葡萄酒です。我が家と同じ、歴史の浅い品ではありませんがね」

というからには、彼が言う我が家とは両親のローズロント公家ではなくカナン・フォスバール家を指すのだろう。称号として、再び彼のような立ち位置の人間が現れない限り使われることの無い家名だ。

「十分に美味しいわ。あなたのように鮮やかで眩しい」

「それは光栄。おかわりをお持ちしましょうか」
後ろに、給仕がさりげなく現れて控えている。

広間の端で、アデルワント側の人々に一瞬のざわつきがあり、視線が集まったのをラーナツタは感じ取った。

「いいえ、ひと仕事終えてから、ゆっくり頂きましょう」
彼女は人波の隙間に肝を据えた瞳で視線を差し込んだ。
そこには、アルター公ヒルデムがいる。

ユットー・オプテルモーは、ヴェネルセン伯爵の紹介攻めから、何とか一拍の間をとって会場から離れることが出来た。

ヴェネルセン伯爵が、自分の画家としての実力を褒め、熱心に知人の紹介するのには、心当たりがある。つまり、お払い箱なのだ。せめて、次の後援者を探してやろうという慈悲、埋め合わせ、あるいは感じる罪惡に見合っただけの贖罪を果たそうというのか。

ともかく、前に仕えた貴族の家でもそうだった。その前はただただ突き出された紹介状ともに追い出された。

溜息を洩らす。

いったい、なにが悪いんだろう？

とぼとぼと、俯き加減に歩く。と、廊下の角で出会い頭に誰かとぶつかった。

「し、失礼」

慌てて顔を上げると、ぎろりと鈍い眼光が彼を睨んだ。

その男は足早に去っていったが、眼光とともにユットーの網膜にはその顔が焼き付けられていた。

喉元までせり上がるうとした心臓が元の位置に落ち着くと、映像となって残ったその男の顔には見覚えがあった。

そう、つい先日どこかで。それは、確か、ええと、いつだったか。たゆたう色彩に溢れた画家的な記憶を彼は写實的に掴もうと、脳裏に描くのだった。

「ラーナッタ夫人、長らく中央から離れておられたようだが、こうして社交の場に戻られて嬉しい限りだ」

ゆつくりと、人々の挨拶を受けながら歩くアルター公の行く手に、微笑みをたたえてラーナッタは立ち塞がっていた。

ヒルデムは、夫人に柔らかな態度でみずから挨拶を述べた。

「こちらこそ、こうして暖かく皆さまが迎えてくださり、感激しております」

二人の会話が交わされるや、周囲の人々が一歩ずつひいていき、自然と空間が出来る。二つの公爵家の対決といっていい。おいそれと立ち入れるものではなかった。当事者である両家の縁者として。

「先ほど、アデルワント伯から伯家の知人縁者を紹介されたのだが、よろしければユルフレーンに連なる方々も紹介していただけますかな」

「もちろんですとも」

ヒルデムを連れ立って夫人は一族の前を歩く。

ユルフレーン家の所縁の者たちが、公に目礼をし、あるいは杯を掲げた。どの顔も皺がより、髪の白い者達が多い。

言葉にも顔にも出さぬヒルデムであったが、それをつぶさに見て取ったはずだ。

頃合いを計ったようにラーナツタは言った。

「隠居された皆様ですわ。なにしろわたくしも、言いたくはありませんが歳をとりましたし、付き合いも古うございます。亡き主人も存命ならとくに隠居しているような歳ですから」

カナン・フォスバールの招きに、アデルワント家もユルフレーン家も、縁者をそろえて応じるという体裁が必要だった。

権力の強いアルター公を前に、いまをときめくユルフレーン家に与するものとしてこの場に出席すれば、敵対勢力であると目を付けられる。ユルフレーン家の当主然として、ラーナツタが周囲に声を掛けても、反感とアルター公に対する恐れで、誰も応じないだろう。そこで彼女は、頼もしき友人たちに手紙をしたためた。

隠居した年寄りたちならば、いま現在それぞれの家の家督にある者達とは無関係であり、当代はユルフレーン家には与しないという言い分がたつ。この場にいるのは、あくまで昔付き合いのあった父祖が勝手に出席したのだと言い張れるのだ。

実際、もし事が起こったとき、言い分どおりに協力を断られるかもしれない。それはそういうものだから、恨みはしない。むしろ今を乗り切るために、わずかでも危険性を承知で応じてくれた友人たちに、ラーナッタは深く感謝した。

「あらジュリオ、よく来てくれたわね」

「ははは、麗しき公爵夫人のお誘いを誰が断ろうかね」

ラーナッタは懐かしい顔に声を掛けた。禿げ上がった赤ら顔の瘦身には、もはや面影もないが、昔は地方きつての美男子で名を馳せた、というのが本人の言。衣装は手が入れてあるが少しくたびれている。

「やあラーナッタ、私も来ているぞ。出掛ける間際に、腰抜けの息子のケツを蹴り上げてやったわ」

すっかり恰幅のよくなった同い年の馴染み顔は、子供の頃は弟コルトスの兄貴分だった男爵だ。

「まあ、お尻をお大事に」

楽しげに夫人は応じる。隣に恐るべき巨人を従えているとは思えない気負いの無さで。

恐れを知らぬ老人たちは、最年少でようやく四十半ば。彼らは我先にとアルター公への挨拶の言葉を口にした。

「公よ、お初に御目に掛かる。中央を取り仕切る当代の大人物にお会いできて光栄だわい」

「まこと、かつてのユルフレーン公に並ぶとも劣らんぞ」

一触即発にも思える二つの血族であったが、まるで街で人気の演者を取り囲むように、彼らは握手を求めた。

アルター公は動じることも無く、彼らに応じつつその顔をつぶさに見て取る。彼らは真実、著名な人物を目の当たりにして好意的に接してきている。ただこの場においては、という区切りがつくが。それを分からぬヒルデムでもなかった。

まったく食えぬ老人たちだ。アルター公はさらに観察を続けて、ラーナッタ夫人に言葉を返した。

「それにしては、幾人か姿が見えぬようだが」

「あら、我が家の親類縁者に随分お詳しいですわね」

皮肉たっぷりの言の葉を慎むように、ラーナッタは扇で口を隠すが、言葉遊びもほどほどに、夫人はぴしゃりと扇を畳んだ。

ここから先は遊びではすまない。己の発する言葉がこの場に居合わせる者達の立ち位置を決める。筋の通らない話をすれば、そこを攻撃されるだろう。

「じつは、我がユルフレーン公国のラプラレア湖の女神にまつわる三年に一度の祭事が一週間後に控えておりまして、本来は孫娘を連れて領地に帰るつもりでしたの」

これは事実ラーナッタ夫人が算段していたことであつた。領地に引っ込めば、ちよつかいもなくなるだろうし安全でもある。ただ、領地に帰るまでの長旅は警護の面でも不安があるので、踏み切れなideいた。

「ですが、カナン・フォスバール様のお取り成しであるこの宴に、当主の座を預かる私が欠席するわけには参りません。ラプラレアの大祭ではありますが、縁の薄いとはいえ我が家門の血に連なる地元貴族の方々にお任せして参上した次第でございますわ」

ラプラレアの大祭は、儀式ばった面倒くささもあるが、庶民の楽しみでもあり、ユルフレーン公国中が賑わうものだ。切盛りする役回りには、役得もある。

危険な薫りの漂うこの宴に出席するか、地元の面倒を引き受けるか、どちら？

言外にそのような天秤を示せば、彼らは故郷のために労を惜しまないことを約束してくれた。

「そうでしたか」

アルター公は、些末事のようにわずか一言でそれを聞き流す。

そうすることで、筋道だてたラーナッタ夫人の言葉が、まるで苦しい言い訳のようにも取れる。

周囲の人々の印象を、巧みに制御しなければならぬ。

「ところで、その肝心の主賓がいらっしゃらぬようだが」

そしてヒルデムは、ふとたった今思い出したかのように、そう口にした。

「主賓？」

「さきほど、あなたの口から出た御令嬢のことです」

ラーナツタは、眉根を寄せるのを長年の経験で踏みとどまった。
(皺は増やしたくないものだわね)

マリーシアは、まだ宴の場に姿を見せていなかった。貴婦人の仕度には時間が掛かるものだ。付け加えるなら、マリーシアには心の準備も。

ヒルデムは弁を続ける。

「まったく、名のあるユルフレーン家の忘れ形見が見つかったというのは、社交界においても明るい報せであった」

取り巻く人々に、杯と視線を向けてヒルデムは語った。

「しかし、いったいどこにおわしたのか」

視線を投げかけられた人々は、その疑問に同調するように頷いた。ラーナツタは、ここが奮起のし所とばかり、おなかに力が入った。とはいえ、端から見れば力みもない。

「それは、いささか複雑な事情で口外できませんの」

夫人は、きっぱりと言い切った。それが譲れぬ一線だと。

マリーシア・レ・ユルフレーンが見つかったのは、帝都の街中であったと事実を語ってしまえば、その近在にヴィスタークという少年がいたこともいずれ知れる。そして、先々帝がいまなおその周囲で民に紛れて生活しているだろう事に、人々は気づくはずだ。

「ですが、皆様に事情をいくらかご説明しなければとは思っております」

好奇心を満たす程度に『事実』を話題として提供しておけば、興味本位で知りたがる人々の詮索は大人しくなるものだ。それでもなお隠された真実を追究しようとするものがあれば、その者の意図には悪意が含まれていると考えてしかるべきだ。敵対者の選別になる。

ラーナツタは、ヴィスタークや弟のコルトスらと打ち合わせた筋書きを披露した。

「実は、孫娘が育ったのは奇しくも陛下がご幼少を過ごされた町だったのです。たまたまユルフレーンの血筋であることを発見された陛下によって、このたびの幸福はもたらされたのでございます」

おお、とどよめきが上がる。

「さすがは陛下」

「まこと、天の祝福を頭上に冠したるお方だ」

皇帝の血筋を讃える言葉がそこかしこで聞こえた。

これには、両方の家門も関係なかった。

ヒルデムは反新帝の立場ではあるが、公にしているわけではない。まして、彼に連なるもの全てが新皇帝ヴィスタークを憎々しく思っているわけではなかった。もちろん、好意的な人々が全てでもなかったが。

「が、先ごろ、お忍びでヴィスターク陛下が我が孫娘をご訪問くださったとき、恐れ多くも賊が襲い掛かったのです」

おもに女性たちの間で、悲鳴のような声上がる。それを安心させるように、ラーナツタは素早く言葉を継いだ。

「幸いにしてその時は事なきを得ました」

だが、その暗殺の首謀者は、様々な情報を持ち得たはずだ。

マリーシアという少女が育った場所が帝都であること。

そこが、皇帝の剣カーテーギュウとマリーシアという兄妹の住む家であったこと。

兄妹の周辺の縁を辿れば、ヴィスタークが少年時代をその周辺で過ごしたであろうこと、そこには先々帝がまだ隠居生活をしているであろうことも。

「この場にいらっしゃるのは信頼の置ける方ばかり。しかし、噂が広まってしまうとどこから不埒な考えをおこす人間の耳に入るか私には想像もつきません。ですから、民に混じってお暮らしになる先々帝の御為にも、これ以上は詮索なさらないでくださいませ」

これは牽制である。

この時点で、マリーシアの住んでいた場所や、彼女が皇帝の剣の妹であるなどという事実を口にする者がいたとするば、それはあまりにも情報を得るのが速すぎる。

マリーシアの家に訪問した皇帝に、暗殺者を放った人間でなければ、こうも早くは知り得まい。

どんなに調べを尽くしたのだと釈明しても、人々は暗殺の首謀者ではないかと疑念を持ち、それを拭い去ることは不可能だろう。

また、マリーシアの素性を無闇に詮索しようとするなら、あらぬ大逆の疑いを掛けられるぞ、という単純な脅しによる予防線の意味合いもある。

マリーシアの出生について話題にしづらくする心理を、人々の意識の裏に滑り込ませることにラーナツタは成功したのだった。

アルター公は澄ました顔で杯に口をつけた。舌の上で転がる液体が、ぴりぴりと脳髓を刺激して、いやがらせめいた策謀を言の葉に変換していた。

「いたいけな少女一人に、アルター公はずいぶん熱心ですこと」

思わぬ声が彼の思考を妨げた。

「私にも人並みの好奇心があるのでね、レプシーヌ男爵夫人。まさか君もユルフレーン家に血縁があるとは思わなかった」

些かの驚きを彼は隠さず振り返り、当代一と謳われる貴婦人を迎えた。

人々の列が、舞台の幕のよう^{リット}に開き、彼女は進み出でる。

「いいえ、私とユルフレーン家には血縁はございません。ですが、先日からマリーシアとは仲良くさせてもらっていますので、ラーナツタ夫人に無理を言って呼んでいただいたのです」

レプシーヌは、夫人に目礼してアルター公ヒルデムに対峙した。

「そしてこれからも、ユルフレーン家とは深い^{よし}誼みでお付き合ひしていく予感がいたしますわ」

ざわ、と場の空気に波が立った。ユルフレーン家の呼んだ多くの

家が、アデルワント家の背後にいるアルター公への敵対心を曖昧にする中、レプシーヌ男爵夫人ただ一人が、その旗の抛り所をはっきりと表明したのだ。

鏡に映る自分の瞳から、マリーシアは目をそらした。

お化粧も、髪も衣装も、支度とはつくに整っている。鏡の中の瞳は、なぜ広間に行かないのだとしきりに問い掛ける。だから、逃げるように目を伏せた。

震えてしまう手は膝の上。

「お嬢さま、そんなに握り締めては、ドレスに皺がついてしまいますわ」

「ばあや……」

藁をも掴む心境か。子供が母親のスカートを握り締めるのも分かる気がする。いつの間にか握った手を開き、マリーシアは皺になりにかけた生地を撫でた。

「あらあら、汗をお搔きになって」

ローナは、湿らせた布で汗ばんだ手を拭いてくれた。ひんやりとした感触が心地よかった。

「お嬢さまは心の優しいお方。ばあやは、お嬢さまが何を恐れているのか、よく存じておりますから。お心が定まりましたら隣室に控えておりますので、お声をおかけください」

マリーシアの手に冷たい手布を持たせて握った手を離すと、ローナはその場を辞した。

彼女を呼び止めたという無為な衝動にマリーシアが躊躇しているうちに、扉は閉じられてしまった。

ローナの優しさと、少し突き放された感じが、また胸を苦しめる。はじめは、ヴィスタークの足を引っ張らないように、夢中で貴婦人を演じていた。それが、ユルフレン家の忘れ形見として生活するうちに、自分の立ち振る舞いがラーナツタやローナ、それだけでなくユルフレン公国に関わる多くの人たちの命運を左右するのだと理解し始めて、マリーシアの胸は縮こまっていた。

勇気を出して、立ち上がらなければいけませんよ、とローナは言っているのかもしれない。

一人になった控えの間だが、静寂はつかの間であった。白塗りの扉が丁寧に叩かれたのだ。乱暴でなく、しかし明瞭な音をたてて来訪を告げ、入室の許可を求める。常に心配りをする使用人の手によるものだ。それがわかるほど、マリーシアは落ち着いてはいなかったが。

扉を開けて入ってきたのは、マリーシアと同年くらいの、召使いの少女だ。

「あの、まだ支度の最中と伺ったものですから、のどが渴いていらっしゃるかわかると思って、それで、お茶をお持ちしました」

「あ、……」

ありがとうに続けて謝絶しようと思ったマリーシアだったが、開いた口からこぼれた自分のかすれ声に苦笑して、少女に頷いた。

少女は嬉しそうな笑顔をみせて、お茶の用意を始める。

「マリーシア様は……」

お茶を入れる手を、ときどき滞らせながら、少女は思い詰めた様子で口にした。

「なんででしょう？」

「あの、マリーシア様とお呼びしていいですか？」

ついに話しかけてしまった少女はぐるぐると思考をめぐらせて、一番初めにお伺いしなければ、と心に決めていたことを思い出したのだった。

「ええ。私にも、よかったらあなたの名前を教えてください」

少女の申し出にマリーシアは笑顔で答えた。そういえば、身近には自分と同じ年頃の女性がなくて、そうした意味では気を抜いた会話をもう随分としていなかった。

「も、申し遅れました、私シュテフィン・フェナーと申します」

シュテフィンは、マリーシアが街の教師に習った礼儀作法と同じようなお辞儀を、かちこちになりながらして見せた。

「シュテフィン……私、どこかであなたに見覚えが……」

「はい、先日のお茶会で。私はアデルワント伯爵家にお仕えしていますので。覚えていてくださったなんて、感激です」

「感激だなんてそんな。私、あなたときっと同じ年くらい。何も変わらないわ」

「とんでもない！ 長らく私のような民草と同じに育てられながら、皇帝陛下にお手を取られた貴婦人としてのご立派な振る舞いは、宮廷には縁遠い私たちにまで噂が届くほどのです」

やや興奮気味に語るシュテフィンは、手に持ったままのポットに気づいてカップにお茶を注ぐ。

「あのときは、夢中だっただけ」

シュテフィンの淹れてくれたお茶を口にすると、マリーシアは胸の中のざわめきが少し落ち着いたように思えた。

夢中といえば、シュテフィンは今をときめく貴婦人とお近づきになれたことに、すっかり浮き足立って、感激の所以とするところを話し始めて止まらなかった。

「アデルワント家にお仕えしている友人たちと、マリーシア様のお噂を聞いては話題にしていますわ。クルフ家のお坊ちゃんがものの見事にあしらわれたとか、ロカス家の純情すぎて色恋に奥手な若様がすっかりお熱だとか」

彼女は、ほかの貴族の家に仕える同世代の友達もいて、お休みの日には一緒に外苑ロンテスキンの街を歩いたり、公園でお茶をしたりして過ごすのだと教えてくれた。自分にもそういう生活があり得たのかもしれない。そんな風に思っ、マリーシアはまぶたの裏の情景に自分の姿を加えてみた。

シュテフィンは続ける。お勤め先の家で、聞くとは無しに勝手に耳に入る話の種は、その家の使用人たちの世間話で足りないところが繋ぎ合わされたり、他の噂も加わったりして量が膨らみ、今度はそれが他の家の友達同士で、また世間話の種になり、さらに量が増える。

時には彼女たちの家や、男の使用人たちによって町の酒場などに噂がばら撒かれることは想像に難くない。

そうしてシュテフィンとは、まったく意識せずに、たくさんの話題を友人たちと共有しているのだった。

それを証明するように、彼女はあの夜の宴の様子をつぶさに語ってみせた。

「まあ、まるでシュテフィンもあの宴に一緒にいたみたいね」

マリーシアは感嘆した。そして、ユルフレーン家の別邸に、たくさん使用人がいなくて良かったと思った。もしそうだったら、これから使用人の目と耳が気になって落ち着いてはいられないから。それから、ローナのことを思い出す。彼女もそんな風に友人たちと噂話に興じるのだろうかと考えた。想像もつかなかった。きっと彼女は大丈夫だ。

「マリーシア様、いま私が口の軽い召使いだと思いいになったでしょう？」

思案顔をしたマリーシアの胸中を、シュテフィンはすぐに悟った。

「いいえ違うの」

マリーシアは慌てて首を振り、悪意を否定した。

「ただ、身近にいる人に私生活を言いふらされていたとしたら、とても残念だなと思って」

きつと傷つくだろう。そんな意味にその言葉を訳せないほど、シュテフィンの想像力は悪くない。だから彼女も、きちんと強く否定した。

「私だって、お慕いしている方たちのことを陰で言いふらしたりしません。アデルワント家の方々の事だってもちろん。陰口なんてしなくても、話題はたくさんあるんですよ？ 今日はどうな方がいらしたとか、どういう方だったとか」

シュテフィンは否定するばかりでなく、違う真実を告げた。彼女の一生懸命さをマリーシアも信じた。

「わかったわ、ごめんなさい」

「いえ、わかっていただければ」
シュテフィン小さく胸を張っておどけると、二人は顔を見合わせて笑った。

外苑ロンスキンにて、せめぎ合う権力の構図が静かに熱を持ち始めたころ、帝都リスターテルクの街も夜の装いに移り変わっていた。

街灯の油に火が点され、往来を店からこぼれた灯りが照らす。

冬ならば、窓も扉も固く閉ざされ、こぼれる灯りは少ないが、夏も間近な季節は、窓も人々の心も開放的だった。ただしそれは、酒精が入った男たちだけの話。女たちの襟元が涼しく見えるようになるには、もう少し季節が進まなければならない。

そんな街路の賑わいが点る有様を、宮廷の迎賓館から見下ろすことが出来た。

迎賓館は、帝都の繁栄を賓客に見せ付けんがために、城壁の一角に高く造られた建築物だ。戦では防壁砦として機能するが、建設されて以来、戦闘に使われた過去は一度も無い。

今宵の皇帝が迎えた賓客は、帝都の警衛長官、貴族会議議長、市長、ルンザー・エリン商会連合の長、そして道先案内警護組合の代表だった。国外の人間をもてなすだけでなく、こうした自国の重要な地位にいる人物と昼夜の会食を利用して意見を交わすのも、皇帝の有意義な公務のひとつであり、迎賓館の用途であった。

ヴィスターク五世は、長方形の卓の左右に並ぶ諸氏を前に、窓の外の時めを見やって、ナイフとフォークを皿に置いた。

皿の上の肉は、切り分けられてはいたが、ひとつも口に運ばれていない。

「そういえば、今夜は外苑ロンスキンのクラウブ長官は欠席のようですね」

珍しくも心ここにあらずの若き皇帝に、警衛長官が水を向けた。列席者の中では、帝都を治める側の人間という意味で、彼がもっとも皇帝の身内と呼べる人物であるからだ。

自身の地位と職務に誠実なこの男にとって、有能な皇帝は歓迎すべき支配者であった。同時に、氣力体力の充実した年齢にある彼だが、貴族たちのような皇帝の失点につけ込むがとき野望は持ち合わせていない。であるならば、この場で若き皇帝を畏れ多くも補佐するのは自分であろうと思ひ当たつての発言であつた。

物思ひに耽つていたかのような皇帝は、我に返ると目線で礼のようなものを警衛長官に寄越した。

「クラウブ・ロンテスキーン準男爵は、カナン・フォスバールが主催する宴の警備にあたると聞いている」

帝都に隣接する特殊な領地を管轄に置く、貴族であり官吏であるクラウブは、この顔ぶれの会食に呼ばれるのが常であつたが、なるほど、カナン・フォスバール主催の宴となれば警備指揮をおろすかにはできまい。警衛長官はその理由に納得した。

だが、他の見方をする者もいるようだ。

「クラウブ・ロンテスキーンとシリス・カナン・フォスバールは友人同士と聞く。となると、彼も……」

そう口を挟んだのは、貴族会議の議長を務めるフォレル伯だ。語尾を濁しはしたが、シリス・カナン・フォスバールの背後に連なる新帝政権懷疑派との関連を示唆しているのだろう。

フォレル伯は、平凡ではあるが物事の公平を尊重する人物だ。だからこそヴィスタークは議長就任を認可したのだ。

貴族会議に立法等の権限はなく、ほとんどは彼ら同士の意見調整の場ではない。せいぜいが彼らの領地間の交通や関税についてだ。だからどの有力貴族やその派閥らも、フォレル伯の推薦と就任に口を挟まなかった。彼の公平さはむしろ喜ぶべきところだったのだ。

そんなフォレル伯が口にした、新帝政権懷疑派のあれこれという話題に他意がないことは、警衛長官にもヴィスタークにも解つていた。市井のものでも、貴族たちの派閥を多少なり把握してはいるだろう。耳ざとい商人なら尚のこと。市長とても——シルヴェンライン帝国における市長とは、行政の長ではなく、純粹に民の代

表としての地位であるが——— それだけ多くの人々を束ねれば入ってくる情報の量も並々ならぬものであろう。

そして、道先案内警護組合代表。

禿頭の老人は、関知せぬ話題には立ち入らぬといった姿勢で、黙々と食事を進めていた。

一同を見まわして、最後に老人を見据えるとヴィスタークは言った。

「どうかな、クラブ・ロンテスキンと直接の面識はないが……。

しかし、この場で何か実りに繋がる話題ではなさそうだ」

「まったくそのとおり。失礼いたしました」

視線の先を理解してフォレル伯が謝罪する。

「いや、客人を前に気もそぞろで失礼したのは私のほうだ。すまない」

ヴィスタークも謝罪を受け入れた。窓を開け、空気を入れ替えたかのように、すっかりと気持ちを入れ替えて目の前のものを見てはいたが、外苑の宴はなお気がかりであった。

16 (後書き)

別サイトで公開していた第一部の公開期間が終了いたしました。
新しい公開方法が決まりましたら、またお知らせします。

よろしくお願いいたします。

控えの間の、ささやかなお茶会は続いていた。

シュテフィン・フェナーの教えてくれる自分の風聞を知って、マリーシアは赤面するばかりだ。これでは表を歩けないではないか。

貴公子たちをあしらう高貴な手並み。それでいて謙虚な態度は好感を呼ぶ。そんな噂は街でも広まりつつあるという。

頬を赤らめるマリーシアの反応を面白がって悦に入ったシュテフインは、大いに噂話を身振り手ぶり演じて見せた。

「皇帝陛下に手を取られた貴婦人はとても可憐で、帝国中のどんな乙女よりも皇妃に相応しい、おそばに女性を寄せ付けなかった陛下が、ついに皇妃候補をお選びになったのだと、人々の噂は次第にそのように総じられるようになったのでございますわ」

そこまで聞いて、ふとマリーシアは我に返った。

庶民たちの人々の明るく楽しい噂話。自分もそこに居たから解る。自分たちに害のない話題を話すときはただの娯楽。会話の中には悪意も意図するものもない。だがそこに至るまでに、たくさん真実、どろどろとした貴族たちの思惑がろ過されているはずだ。

「ねえ、シュテフィン。他の貴族の方々が、私やユルフレーン家の事をどんな風に言っているのか教えて」

「ですから、さっきお話したとおりですわ」

シュテフインは答えた。だが、楽しいお茶会の話し相手、そんな空気はマリーシアのまわりから消し飛んでいた。

「教えて」

静かに、真摯にマリーシアはシュテフインをみつめる。

そう、実害と実利を被る貴族たちの間でなされる会話は、ときに奇麗事ばかりではないはずだ。

シュテフインがみつめ返すマリーシアの瞳は、無垢であっても決して傷つかない強さがあるように見えた。

「衰えた家系が息を吹き返すのではないかと。かつての栄光を取り戻すために、皇帝陛下に取り入ったのだとか、そもそも陛下に取り入らんとせんがために、どこぞの娘を忘れ形見だとでっち上げたのだというひどい噂もあります」

冷たいものが、マリーシアの背中を撫でたような気がして、一瞬息が止まる。経緯の差こそあれ、それが真実に最も近いからだ。

「それから？」

マリーシアは心の動揺を振り払った。いまは、ヴィスタークの立場とユルフレーン家を守らなくてはいけない。シュテフィンの知る噂話には、なにか自分が役に立てる糸口があるような気がするのだ。「もしや皇帝陛下はいまや何の力もないユルフレーン家から皇妃を娶るのが好ましいとお考えなのでは、とか、寵愛の度が過ぎてユルフレーン家へのえこひいきが始まるのではないかとか、ユルフレーン家が新帝派ならば今のうちに目を摘んだ方が良いとまで、猛々しくおっしゃる方もいるそうです……」

「それは、どなたがどんな風に言っているの？……いえ、それはあとで教えて」

誰が言っているのか今わかって、自分にはそれがどういう人々なのか判らない。だから、いま並べられた言葉の方向を考えるべきだ。彼らの願望、不満、嫉みがどこを根ざして、どこに向いているか。

現皇帝であるヴィスタークを快く思っていない派閥があるのは、マリーシアも貴族の家に身を置いて次第にわかっていたことだが、それが召使いの間でまで声高に話されているのは驚きだった。これなら街でもいずれそういう噂が聞けるようになるだろう。もしかしたら、自分が噂の波を高める要因だったのかもしれない、とマリーシアは考えた。

そして、最近知り得たのは、現皇帝を快く思っていない人々の旗印が、帝位継承権を持つシリス・カナン・フォスバールであるということ。彼の帝位継承権は、現皇帝に子が出来た時点で消滅すると

いうこと。

簡単に消え去るかもしれないが帝位継承権を持つ、少しあやふやで曖昧な立場の青年。彼の帝位継承権を消し去ることが出来るのは、現皇帝の子を産む皇妃。それに今一番近いと目されている自分。

と、マリーシアはシュテフィンが必死に息を殺しているのに気づいた。声を出すと、途端に泣き出してしまいそうだから、彼女はしきりにこみ上げてくる最初の嗚咽をこらえていたのだ。瞳には、たまった涙が決壊寸前だ。

「ごめんなさい、怒っているわけではないの。ただ、私も皆の役に立てることが見つかりそうだったから、つい真剣になってしまつて」「い、いえ、こちらこそ申し訳ありません。私の知っている噂話がマリーシア様のお役に立てたのなら嬉しいですわ」

シュテフインは指で目尻を拭った。

気の抜けた表情のシュテフィンだったが、次の瞬間、控えの間の扉が外から叩かれて、彼女の心臓は凍りつくようだった。

入室の許可を求める声は、あろうことか彼女の主、アデルワント伯爵夫人であつたのだ。

マリーシアは、シュテフィンが叱責されるのを怖れているのは理解したが、まさかない振りをするわけにもいかず返事をする。

「あなた、何をしているの」

入るなりシュテフィンを目にしたアデルワント夫人は、自分の家の使用人がそこにいることをまず見咎めた。

「奥様！ マリーシアにお茶を……」

「そう、ご苦労さま。長居してはお邪魔よ。もう行きなさい」

シュテフインはもう口を開くことも出来ず、お辞儀して退がっていった。

夫人は、彼女の姿が見えなくなるのを待つて、口を開いた。

「マリーシア、我が家の使用人が失礼をしました。あの子は、若い子達の中で一番落ち着いているから連れて来たのだけれど、たまに思い切ったことをするようね」

「いいえ、おかげで気持ちがとても落ち着きました。どうぞ、お叱りにならないでください」

だが、夫人はゆっくりと首を振った。

「むしろ、わたくしが叱咤したいのは貴女」

意外な言葉に、マリーシアは瞳をまっすぐに向けた。疑問と驚きの瞳。その正直な瞳にアデルワント伯爵夫人は答える。

「いったいいつまでお祖母様のスカートに隠れていらっしゃるおつもり？」

その言葉には、さしものマリーシアも返答に窮する。

そこへ、開かれたままの戸が再び叩かれた。新たな来訪者はこの館の主である。

「まったく、アデルワント伯爵夫人は厳しいお方だ」

「シリス様、殿方はご遠慮願います」

夫人の制止は強い語感ではなかった。受け取る側が畏まれば、それだけで辞去するだろう。だが彼は、透明な硝子のように、夫人の視線をすりぬけてしまう。

あの日、宮廷の宴で出会ってから、幾日振りの少女を見下ろす。

彼女は、あの日のように弱く、不安の色を貴婦人の仮面で隠してはいなかった。強い輝きが瞳にはある。広間に姿を見せることが出来ず、控えの間に縮こまっていたはずの彼女が、わずかなあいだに何を掴んだのか、その強い瞳は。

「そろそろ、君が私を必要としているのではないかとね」

貴女ではなく、彼は君と呼んだ。

それは親愛の意味であろう。この青年がそうした言葉を口にするとは。アデルワント伯爵夫人は二人の空間に、わずかばかりながら目を見張った。

椅子に座ったマリーシアは、まっすぐに黄金の髪の貴公子を見上げていて。彼の美しさは、常から人々に自然と誇示されてしまうほどの存在感だ。一方、マリーシアはその境遇で話題になっただけの大人しい娘かと思っていたが、何を胸に秘めたのか、強い眼差しは

シリスを射ぬかんとするほどだ。広間に出てこられなかった娘のものではない。

「シリス・カナン・フォスバール殿下。今宵は尊いお志で貴重な場を提供いただきありがとうございます。ぜひ皆様に、シリス様から紹介していただきたく存じます」

カナン・フォスバールの名が示すところを知ってなお、マリーシアは挑むように希望を告げた。

「喜んで務めましょう」

そして二人は、どちらともなく差し伸べられた手を取り合った。

広間の緊張の空気は、やや緩んでいた。一時は、ラーナツタ夫人とアルター公の対決に、レプシーヌ男爵夫人の、いわばユルフレーン側につくという大胆な発言があり、アルター公がどのような対応を示すか周囲は息を呑んで見守ったのだったが、彼はその友好を羨み、交わりに加わりたいものだと、ごく当たり障りのない社交の句で返したのだった。それから少しずつ、ユルフレーンとアデルワントの家に関わる人々同士で、交流の空気が漂い始めていた。

「やあ、レイトリさん、見違えましたね」

今日は珍しく絵の具が付着していない服でめかし込んだ若き画家が、自分のことは棚に上げて声を掛けた。

「ユットー、君も来ていたのか」

貴族ばかりの宴の場で、背中から掛かった声にレイトリが気安く返事を出来る相手は、おそらく彼だけであろう。だから上司も、その人物には自然と興味が向いた。

「誰だ？」

「はい、あの男の似顔絵を書いてくれた画家です」

ユットーは誰だかもわからないクラウドに、愛想の良い顔で挨拶した。

「いやあ、せっかく住み込みで雇いあげていただいたのですが、お払い箱のようで、今宵は次に召抱えていただける家を探せるようにと、お情けでこの場に連れて来ていただいた……ようなのです」

「なんだ？」

ユットーの不明瞭な語尾に、レイトリとクラウドは顔を見合わせた。

「いえ、たぶんお払い箱で、ヴェネルセン伯爵ははっきりおっしゃらないだけです……どうにも私は、なぜか一つの場所に長居出来ませんで。その前もそうでしたし、思い起こすとどのお邸も、どのお

邸も」

本当に思い起こした挙句、長続きした記憶がないことによく気づいたユットーは愕然として、頭が真っ白になった。事情が掴めないものの、レイトリが少し気の毒そうな顔をしていると、画家は脳裏に描かれている違う記憶の絵柄を思い出して口を開いた。

「ああ、そうだ、思い出した」

実に写実的な彼の記憶は、ある人物の顔を思い描いていた。

「なにをだ？」

「レイトリさんの顔を見て思い出したんですよ。ほら、例の似顔絵の男です。先ほどすれ違いましたね」

その瞬間、レイトリとクラウドは鋭い表情で周囲に目を走らせる。念願の獲物を、ついに狩場に追い詰めたかのような気分だ。と、これはクラウドの感覚。レイトリは貴族の嗜みたる狩猟会など参加したこともない。

「どこで見たんだ、ユットー」

「ああ、すれ違ったと言っても、小一時間ほど前のことで」

二人のあまりの真剣味に、怒られるのではないかとユットーは恐縮した。

「油断はするな、この場にいないのは間違いない」

「は、閣下」

その言葉で、緩みかけた緊張をレイトリは保った。指揮する部下の見るべきところを見ているクラウドは、さすがに上司、いや上官であった。

「しかし、名門貴族の縁者となると、両家を合わせて軽く百人は超えています」

左右を見渡したところで、人の波の端までを見渡すのは無理であった。

クラウドは視線を左右に流しながら思案する。その視線が、見知ったばかりの画家に当たったところで口を開いた。

「似顔絵は、その場に相手がいなくても描けるのだったな」

その問いにユットーが答える。

「ええそうです……ああ、なるほど」

彼の思考は、まっすぐに走ればとても速かった。

「モチーフはもうすっかりと焼きついていきますから、絵の具を使ってちゃんとした絵として仕上げられますよ」

「いや急ぐ。似顔絵の程度でけっこう。ただし、絵画一枚の値段をつけさせてもらおう」

「承りました」

ユットーは綺麗にお辞儀する。そこは貴族相手に慣れた仕草であった。

「な、なんですか？」

取り残されたレイトリばかりが、二人の顔を交互に見やった。

わずかばかりの後、歓談の声がざわめく広間に、明瞭な声が人々の関心をひきつけた。

「皆さん、よろしければ目とお耳を拝借。私は、ユットー・オプテルムーなる画家でございます。縁あって今宵は皆さんとひと時を共有させていただきました。せめて恩返しに、楽しい時間となるよう画家の手先を活かして余興を一つ——」

何気なく、人々の中心に立ったユットーは、手馴れた雰囲気ですとうとうと声を上げた。

「いま、庶民の間では、このような似顔絵と申すものが流行っております、画家たる私にすれば基礎も基礎。ですが、余興としては手間も掛からず面白かうと一筆」

掴みが肝心とばかりに、用意しておいた似顔絵を高々と掲げる。絵を掲げるのは、助手役のレイトリだ。

「おお、アルター公とラーナッタ公爵夫人ではないか」

アルター公の存在感のある風貌、ラーナッタ夫人の柔らかな表情がわかり易く描かれていた。

さらに、ユットーはレイトリを椅子に座らせて描き始めた。お得意のお喋りをする間に、目の前にした青年が描き上がると、場内から笑いを大いに含んだ声と拍手が起こった。

レイトリの特徴を捉えた顔が、童話の小人族のような小さな体にくつついており、椅子に座っているはずが、椅子に片足を乗せた立ち姿で格好をつけている。

「では、お次はこの場にいらっしゃるどなたかのお顔をそらで描きあげます。あなた様のお顔か、お隣の方、はたまたお知り合いのお顔かも知れません。絵を見てどなたのお顔か当ててください」

画板に新たな紙を乗せて手を動かす。実は時間を短縮するために、半分描きあがっている。どうせなら全部描いておいたらどうかとレイトリが準備のときに口にしたが、ユットーは首を振った。その場で記憶だけを頼りに描くという作業自体は、先に描いておこうがユットー本人には変わりのない事実だが、観衆を引きつけるには実際にその場で描いている臨場感が必要である。そして、この策略は観衆に見てもらわなければ始まらないのだ。

さらさらと、いとも簡単に描いている様で、容易くは獲得できない描き手の技巧が、紙の上に費やされていく。

描きあがった紙をレイトリに手渡す。助手が、これまでの作品と同じように高く掲げるのを、人々はわくわくして見守った。そんななか、レイトリはまったく違った種類の緊張で似顔絵を掲げた。

端のほうで息を呑むクラウブ。同時にレイトリも唾を飲み込んだ。あの顔の持ち主が、この場にいるのだ、どこだ、どこにいる？

レイトリが似顔絵を掲げた瞬間、一部で明らかな反応があった。

「おお、なんと言ったかな、彼は」

「シブレン子爵だ」

思案顔の貴族が、指を差して回答を披露する。

「そうだ、間違いない」

「ふむ、言われてみれば確かにシブレン子爵キルク殿下だ」

レイトリは端に控えるクラウブに視線を送った。上司は頷き返す。

ユットーは進行を続ける。

「シブレン子爵、ぜひ似顔絵を進呈したいので、前においでくださいますか」

これで、実際にレイトリが顔を見てあの男と同一人物であれば、後で事情を聞くことも容易い。

再び緊張が高まった。しかし。

人々は左右を見て互いの顔を確認したが、似顔絵の人物は居合わせっていない様子だった。

「残念ですが、席を外されているようですね。こちらの絵は私からお渡ししておきましょう」

ユットーが余興を締める声を聞きながら、レイトリは今度こそ緊張が緩むのを感じた。もしかしたら捕り物もあるかもしれない、などと気を張っていたからだ。よく考えれば、そんなことはあり得ないのだが。

「よくやった。あとはお前が、シブレン子爵を確認すればいい」

クラウドはレイトリに囁いて肩を叩いた。その肩に手を置きながら、クラウドが何気なく視線を向けた先で、ヒルデムの視線とぶつかった。アルター公ヒルデムである。

公は意に介した様子もなく視線を外した。クラウドには、その胸中を推し量るのは不可能であった。

18 (後書き)

・お知らせ

第一部のバックナンバーは、現在非公開の状態ですが、新規の読者様のためにメールマガジン配信時にリンクをつけていますのでご利用ください。

<https://www.alphapolis.co.jp/magazine/each.php?magaid=1000255>

「皆様、余興も終わりましたところで、当家の主より、いと麗しきご婦人を紹介させていただきます」

広間にざわめきが残るなか身形を整えた初老の家令が告げる。

「マリーシア・レ・ユルフレーン様」

なめらかにはっきりとした発音でその名を告げたとき、余韻を残して消え去ろうとしていた余興のざわめきが、驚きのものとなって熱を取り戻した。

広間に続く階段を、シリス・カナン・フォスバールに手を取られて降りてくる貴婦人の姿。その光景は、宮廷での宴の再現であった。大人になりきらない可憐さを残した少女の美しさに人々は目を奪われた。しかも、それだけではない。この構図がどういうことであるか、色恋にかしましい女たちも、権力争いの駆け引きを切り離して考えられない人々にも、それがすぐにわかった。

マリーシア・レ・ユルフレーン。彼女は、いま玉座にいる者と、

玉座に最も近い者、両方の男性に手を取られたことになるのだ。

表の美しい部分を若い娘たちが半ば嬌声を上げて噂し、裏の政治的な意味を大小の権力者たちは勘ぐった。

ラーナッタ夫人は厳しい顔をして孫娘を見上げ、ヒルデムは固い表情で内面を悟らせない。横を向いて遠くから様子を伺う夫人の視線を躲して、ヒルデムは広間を出ていった。

階段を降り立った二人の美しさは、近寄りがたい雰囲気だった。

まるで絵画のようで、その額縁の内側に自分などがどうして入れようかと、マリーシアと同年代の少女たちはやや遠巻きに取り巻いた。「さあ、みな君と話がしたくて仕方ないようだ」

「はい、ありがとうございます。シリスさま」

にっこりと微笑み返して、マリーシアはシリスの手から離れた。

「ごきげんよう、皆さま。マリーシア・レ・ユルフレーンと申しま

す」

マリーシアが挨拶して少女たちに門戸を開くと、彼女たちとの隙間は一步二歩と埋まっていった。

「あちらで私たちとお菓子でもいただきますませんか？」

「それよりきつとマリーシアさまはお食事がまだよ」

友好的な心配りを見せて、彼女たちはマリーシアを輪に取り込むのに熱心だ。輪に入れられたり、除け者にされたり、静かに街で暮らしていたときと違って大変だ、とマリーシアは思った。

「マリーシアさま、シリスさまとは親しくされているんですの？」

聞きたくてしょうがないのはそこである。それぞれが挨拶を交わしながら、誰が切り出すのかと、少女たちはうずうずしていたに違いない。

「シリスさまは、このような華やか場に顔を見せる勇気がない私の手を引いてくださっただけですわ」

質問責めがはじまると、マリーシアは丁寧に、微笑を絶やさず答えるのだった。

レプシーヌ男爵夫人は、少女たちの輪の外で一幕を見守っていた。
(あの瞳、貴婦人におなりね)

何かを覚悟した少女の瞳を、確かに彼女は見て取った。覚悟とともに、彼女はユルフレーン家を守っていくだろう。輝きを持つ少女を見出した者としては嬉しくもあるが、彼女の祖母は心穏やかではないはずだ。

「ラーナッタ夫人」

レプシーヌ男爵夫人に、そんな風に思い致されているとはつゆとも知らず、ラーナッタは自分の名を呼ぶ女性の声に振り返っていた。

「アデルワント伯爵夫人」

「恐ろしい子ですね、貴女の孫娘は」

少女たちの輪を目線で示しながらアデルワント伯爵夫人は感想を

口にした。

「身内から言わせてもらえば、ただの恐いもの知らずよ」

「そうですね……でも、気の優しそうな子。きっと貴女のご苦勞を察して必死に考えたのでしよう」

マリーシアがシリスの手を取ったということは、けして彼女が、ひいてはユルフレーン家が、現皇帝の側と決まった存在ではないと示すことになる。現皇帝を快く思っていない人々は、ユルフレーン家を敵と見ればよいか判断を付けづらくなる。

しかし、マリーシア個人は違う。結果として、皇帝ヴィスタークの治世のもとで権力を得ようと皇妃の座を狙う貴族、シリス・カナン・フォスバールを擁立しようとする派閥の貴族、その両方の貴族たちから疎まれることになるのだ。

ユルフレーン家が敵味方であるかはさておき、マリーシアという人間に焦点を絞っていえば、皇妃の座を狙う貴族たちにとって邪魔な人間ということになる。

それでも、こうすることによってユルフレーン家全体の安全が図られるのならば……。

アデルワント伯爵夫人も、ラーナツタ夫人も、そうしたマリーシアの思考の経緯に思い至ったのであった。

それを思いつくまで、重圧を跳ね除けられなくて控えの間で一人震えていた少女。そこいらの若い娘なら、何も考えずに宴に姿を見せて気楽に笑っているだけ。あの少女は、いろんなものに責任を感じて背負おうとした。責任を全うする方法がわからなくて、だからこそ重圧を感じ、そしてやっと見つけたのだ。自分が荷を負う方法を。だから堂々と姿を見せた。こうすれば、矢面に立てるのだという方法で。

こうして、夜宴はつつがなく終わった。もつとも、最初の小さな波紋が湖面を濁らすに至らないのは、往々にあることではあったが。

19 (後書き)

・お知らせ

第一部のバックナンバーは、現在非公開の状態ですが、新規の読者様のためにメールマガジン配信時にリンクをつけていますのでご利用ください。

<https://www.alphapolis.co.jp/magazine/each.php?magaid=1000255>

ユルフレーン家の馬車は、行きと同様に会話なく静かだった。暗い街路の景色が車窓に流れる。

大事を前にした緊張ではなく、固い沈黙が車内にあった。主人の心情を心得てローナも喋らない。

ラーナッタは押し黙ったまま、ユルフレーンの別邸に帰っても口を開かなかった。

夫人は居間に続く廊下をすたすたと歩き、灯りの燈った部屋に入るとぴたりと足を止めた。仮初めの祖母の背中についてきたマリーシアが、不安になって口を開こうとしたその瞬間、ラーナッタは厳しい顔をして振り向いた。その表情に気圧されたマリーシアは、息がつかえて発しようとした言葉が咽喉の奥に落ちていった。

確かに勝手なことをした。ユルフレーン家の命運を左右する場で、権力争いの軸になる人物と勝手に親しげにして見せたのだ。なにか自分ごときでは計り知れない動きに繋がるかもしれない。でも、それがいいと思ったのだ。

だから自分を信じて、マリーシアは伏せかけた瞳をまっすぐ祖母に向けた。

すると突然、がぼっ、という音でもしそうな勢いで、ラーナッタはマリーシアを抱きしめたのだった。

「お、お祖母さま？」

ふくよかな感触に包まれて困惑するマリーシアの耳元に、掠れてくぐもった声が届く。

「馬鹿な子……」

「お祖母さま……」

「馬鹿な子……こんな家、あなたの隠れ蓑にして、使い捨ててしまってもいいの。後継者がいなくなれば、どうせは陛下のお手元に領地も戻る。いまさら衰退した家門よ。くだらない争いに、あなたが

命をかける必要はないの」

ラーナツタは、孫娘の頭を優しく撫でた。

「私は、恩返しがしたいの、お祖母さま。だから……」

マリーシアは自分を包んでくれるぬくもり、頭をただ撫でてくれるその心に応えたい。その気持ちが伝わるように、マリーシアも祖母を抱きしめ返すのだった。

帰りの馬車に乗り込んでからも、そのちょっとした興奮は冷めやらなかった。レイトリを引き連れて馬車へ向かうクラウブの足取りからも、興奮しているのが伝わってきた。

彼は馬車に乗り込んで御者に合図をするや、口を開いた。

「今日は良くやった。あとはシプレン子爵キルクが、お前が目撃した人物であるかどうかを確認すればいい」

この任務は少しもなれることが出来なideいたが、褒められるのは悪くない。いつもの借り物の豪華な衣装も、冷や汗を掻いた分だけ馴染んだ気がした。衛士の制服の、新品でおろしたての時くらいには。レイトリは首元を緩めながら疑問を返す。

「しかし、シプレン子爵キルクという人物が、私の目撃した男であったとして、彼は別に悪事を働いたわけではありませんが……」

クラウブには確固たる読みがあるようで、その答えはすぐに返ってきた。

「事件には、振り返ってみれば前兆がある。マリーシア嬢を男がつけていたのなら、いまや時の人たる彼女だ。それが何かの前兆と疑ってかかるのはやり過ぎだとか、徒勞であるなどとは思わない。事前に察知できたと喜ぶべきだ」

レイトリは神妙に上司の考えを聞いていた。

最初はそれこそただの勘だ。間違いであれば誇大妄想と自ら恥じ入っていたかもしれない。

「そしてこれは、大きな騒動になるかもしれん」

藪を突いて蛇が出る、十中八九出してしまうとわかって藪を突くようなものだ。そんな思いまではクラウブは口にしなかった。

「シプレン子爵キルクは、誰の招待であの夜宴に来たか」

「それは、アデルワント伯爵……その背後にいるのは、アルター公？」

シブレン子爵家は、ユルフレーンに連なる血ではない。

「そしてラーナツタ夫人の言葉をそのまま信じるなら、マリーシア嬢を訪問中の陛下に賊が襲い掛かった。近衛府に問い合わせればわかる事だが、おそらく暗殺未遂事件だ」

「まさかアルター公が!？」

「まだそこまで断定は出来ない」

クラウブは声を押さえるしぐさをした。車外で馬車を操る御者の耳に届いてはまずい。何人にも噂の種ひとつ与えてはならない。

「どうあれ、帝都を震撼させる事件です。噂くらいはとくに流れていても良さそうですが」

「そのとおりだが、市井で暮らしていたマリーシア嬢が見つかったのが、陛下が過ぎされた街だと言うのなら、いまなおその付近では先々帝陛下がお暮らしのはずだからな。あまり大きな発表はできないのだろう」

「ということは、不逞の輩どもは先々帝陛下の所在も把握しているのでは？」

「そう考えて間違いなからうが、それは近衛府に任せるしかないな」とは言うものの、クラウブは先々帝の安全については心配していなかった。これは帝国宰相コルトスやヴィスタークの読みとも一致する。賢帝としての偉業に対する畏怖は神に等しく、いま現在権力を手放した彼を弑する利点がないのだ。

「これと同時期に、マリーシア嬢に人を付けておくなど、事は起こさぬにしても、執拗に情報を集めている人間がやることだろう？」

レイトリは確かに、と首を縦に振る。

「容疑者は疑えばいくらでも増やせるが、さしあたりアルター公をその中に含まれることになる」

なにしろ、皇妃を我が家から出したいと望む貴族はいくらでもいるのだ。そんな中で、もっとも手強い権力者を含めるのは、できれば避けて通りたい筋書きだった。難敵に過ぎる。

「さて、そこでだ」

「はい」

「どうしたものか」

クラウブは両手を挙げた。

「は？」

間の抜けた単音が、咽喉の奥から本人の自制をかくぐって飛び出した。きつと隠そうとした腹の底から、まっすぐ出て来たに違いない声だった。

「外苑ロンテスキんに滞在中の令嬢に危害が及ぶなら、それを警護するのは我々の仕事だ。そうなったときに、調査に協力するのももちろん。だが、我々の職分はこの外苑に限られる。それ以外で起きた事柄に首を突っ込むのは、貴族同士の派閥争いや足の引っ張り合いと同じだ」

「それでも、なにか手をお考えなのでしょう？」

「いいや、まだなにも」

クラウブは打つ手を放棄したかのように腕を組んだ。

「しかしそれでは！」

「惚れたか？」

「そ、そんな浅はかではありません！ たしかに、お美しい方、とは思いますが……」

宴のほんのひと時だが、遠目に見た噂の貴婦人は、想像以上に美しかった。そして、シリス・カナン・フォスバールと並び立つ気高さを感じた。

「彼女は一六歳だそうだ。世が世ならそんなに畏まるほどの年齢じゃないぞ」

「一六なら妹と同一年です。か弱い少女なら尚の事どうにかしてあげるのが大人でしょう！」

共有していた仕事の熱などすっかり冷めたような目で、上司はレイトリに返す。

「私にも、ロンテスキン準男爵家という家門を守る義務がある。決して正義感だけで動いているわけではない」

「そんなことは知りません！」

折りよく到着して馬車が停まる。レイトリは飛び降りるように馬車を出た。

「……正義感の占める割合が多い、とは自負しているのだが」

誰に告げるでもない弁明は、草葉の陰の妖精にしか聞こえないような小さな声だった。

乗り込むときは逆に、レイトリの背を追って邸へ向かうクラウブは、その途中、遠い西の空で雲間が光るのを見た。

「雷か……今宵は雷帝がのんびり散策のようだ。あの分だと、明日の昼ごろには雨かな」

その稲光はレイトリも見えた。まさか上司の眩きが当たるなどとは一分も想像していなかった。

その夜、まだ雷鳴は遠い。

たたきつける雨とともに、レイトリ・フェナーは上司を恨んだ。クラウブの眩きどおり、雨が落ちたからなのか、彼の命令である男を探し回った挙句、いま目前にするその男に命を狙われているからなのか。

その襲撃は、あくる日の午後であった。

ユルフレーン家別邸の警備の任に当たる昼間、レイトリ・フェナーは狙撃され、あの男が襲い掛かってきたのである。

槍と剣が交錯する向こう側で、レイトリを冷静に殺害しようとする目が、獲物の様子を見定めていた。

額がひりひりする。レイトリは、初撃の矢を受けた自分がなぜ生きているのか思い当たった。制帽には鉢金が仕込まれている。そのせいで制帽は重く、若い衛士には不評だ。金鍍金の隊の徽章も、多分矢尻を受ける盾になったに違いない。でなければ、レイトリの意識は地上から神々の原へ飛び立っていたことだろう。

衛士隊の栄光と伝統の制服に感謝を。

「シプレン子爵……」

レイトリの咽喉からその名がもれると、男の目が反応したのがわかった。

（やはり、そうだ！）

その確信に、レイトリは氣勢を吐いて剣を押し返す。足を払い、突きを繰り出し、修練のとおり、槍を振るうが、男は軽々と見切る。男は返し手に剣を叩きつけた。ただ勢いで圧倒するように連続で打ち付けると、それだけでレイトリは劣勢に立たされた。

「平民ごときの技で勝てると思うな」

男は、レイトリの防御の隙をあざ笑うかのように剣を突いた。線の攻撃には対応できても、レイトリの技量では点の攻撃は防げなかった。男の剣がレイトリの肩を突く。痛みに後ずさって歯を食いし

ばった。

濡れそぼった体の、肩口の一点だけが焼きごてを当てられたかのように熱い。

痛みで片手が動かない。死ぬかもしれない。恐怖が精神の背景を暗く彩り始めると、息がうまく吸えなかった。

レイトリは槍を棍棒のように振り下ろす。死を遠ざけるように、だが腰の引けたそれは技ですらなかった。

男は悠々と槍を手で受け止め、力ずくで奪い取る。奪い取った拍子に高く掲げられた槍の穂先。その瞬間、歴然とした平民との力の差を暴力によって体現した彼は、冷酷な顔を微かに酔わせていた。そこへ雷光と天が裂ける大音声が、鼓膜の捉える音という音を掻き消した。

眩い光がレイトリの視界を覆う。そのなかで、黒い炎の人柱が轟々と燃え盛った。男の断末魔が雷鳴と合わさり、硬直した心の臓の音とともに消え去る。

雷鳴が治まり、周囲に雨の音が戻る。黒い炎に見えたそれは、強烈な光の元でそう見えたのだろう。いまは赤とも橙ともつかぬ鈍い色で、人の形をした黒焦げのものをなお揺ら揺らと燃やしている。

いつのまにか地べたにへたり込んでいたレイトリは、石畳についた手の冷たさで我に返るまでに、数分を要したのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8109h/>

皇帝の剣と姫君 第二部

2011年6月13日23時37分発行